

ゲート・忍者来れり

体は大人！心は中二！

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ヴァーチャルリアリティの技術が当たり前の現代で

アパートで一人暮らしをしながら会社に通う、VRMMOが趣味の唯の会社員。

変わらない日常を過ごし、青春のほとんどを消費して来た趣味のVRMMOを満喫する。

そんなある時、ゲーム内でバグが発生し、ゲームが現実か分からな
いまま、会社員……いや、忍者の王『バサラ』はゆつくりと前に進む

目次

16話	95
15話	90
14話	85
13話	80
本編第一部終了記念・ZORUZARU熱血伝!!	71
12話	66
11話	61
10話	56
9話	50
8話	46
7話	41
6話	37
5話	32
4話	28
3話	23
2話	18
1話	11
プロローグ	1

プロローグ

彼の名前は高島（たかしま）健吾（けんご）

ヴァーチャルリアリティの技術が当たり前の現代でアパートで一人暮らしをしながら会社に通う、VRMMOが趣味の会社員。

変わらない日常を過ごし、趣味のVRMMOを満喫する。

ゲーマーにとっては、まさに理想の一人暮らしをしていると言えよう。

さて、そんな彼がもつともはまっているゲームについて説明しよう。

『NARUTO疾風伝―大戦絵巻―』である。

このゲームはプレイヤーがカスタマイズした忍者となり、国を運営する戦略シミュレーションゲームで主人公が国のトップになり部下となる忍者をふやしては領土を広め、国民であるNPCを集めて自分の国を強くしていくと言うものだ。

戦闘要員として登場する忍者は課金したポイントやゲーム内で使われるお金をガチャで消費して欲しい忍びを勧誘したり、運営が開催するイベントのクリアなどで普通では手に入らないキャラなどを手に入れることが出来る。

プレイヤーの目的は領土を広め、国の軍事・技術などを発展させる事。

国民と職人を増やし国の施設や資源のレベルを上げつつ、任務などで里の問題を解決したり、他プレイヤーの拠点を落として資源やお金をもらうことがこのゲームの基本である。

さて、次はこのゲームの魅力について話そう。

自分好みの国に育て上げることも魅力の一つではあるのだがもつとも大きな理由は、自分の好きなキャラクターのみで構成された部隊の編成。憧れの忍術の使用。

そして、プレイヤーが好きなキャラクターの好感度を上げながら一緒に戦う事が出来るというファンにはたまらないシステムが存在す

るからだろう。

彼を含めた全てのプレイヤーが、この理由でこのゲームをプレイしているのだからまず間違いないと言えよう。

巨乳くノ一は俺の嫁!!

「さて、そろそろアップデートも終わったし、ゲームの続きをやるか……」

この日行われるメンテナンスとアップデートに合わせて拠点の位置がランダムで変更される。

理由は地域によって戦力が集まり過ぎていて、マナーの悪いプレイヤーによる初心者狩りや、上級プレイヤーの属国にされたりと初心者向けのゲームでは、なくなってきたのだ。

そこで運営が新規ユーザーの獲得の為に考えたの『拠点の強制ランダム転移』。

廃課金で強いプレイヤーほど、攻めにくくて守りやすい場所に国を建国しており、初心者は立地の悪い場所に建国せざる得なかった。

しかし今回のランダム転移によりその優位性は崩され、運営の匙加減一つで不動であったランキング上位同士の国が争い、滅びるかもしれない。

そしてアップデートのお知らせと共に書き込まれたネット掲示板の噂では劣悪な環境に上位プレイヤーを集中させて、一気にランキングを書き換えを狙っているだとか書かれており彼は正直不安でしようがない。

一時期は毎晩の飯を削ってまで運営に貢いで完成させた最高の国。それが、無くなるのは今まで貢いだ金がすべて水泡に消えるという事だ。

ふざけるな!!あのキャラを地獄の様なガチャで出す為に幾ら賭けたと思ってる!!

毎回毎回出てくるのは忍術の巻物や装備アイテム!!

十連回して一人しか忍者が出てこないことがあるがどうやってやる!!

楽しくも辛い時期を乗り越えた彼は、少しだけダークサイドに墮ち

てしまった。

……………。

「……やるか」

彼はヘッドタイプの機械を頭にかぶり、ベットの横になる。

後は機械の電源を入れて、仮想世界にダイブするだけ。

右手を頭に被った機械に伸ばして電源を入れる。

暗くなった視界に現れたのは彼が心血を捧げてNPCに作らせた最高ランクの城の一室。

広々とした部屋に豪華絢爛な洋式の家具。

壁には最高ランクの手裏剣や刀が飾られている。

これが現実であったのなら家具だけで数千万を超えているだろう。

しかし、視界に部屋が移ったと思ったら壊れたテレビのようにザザとなる不快な音と乱れる景色。

「まさか……不具合だと」

アップデートの終了でたまに起こる不具合。

それが起こると不具合の処理が完了するまでゲームはプレイできないうえに強制終了させられる。

「つち、強制終了したら時間を見てもう一度ダイブする……?」

彼は耳障りな音に苛立ちつつ、ログアウトしようとしたがすぐに景色の歪みは無くなった。

どうやら正常に戻ったようだ。

おそらくゲームの不具合ではなく機械の不具合だったのだろう。

少し古いタイプのダイブギアだし、そろそろ変え時か……。

かなり金が掛かる事が予想され、気分が落ち込む。

まあ、騙し騙し使えばしばらく大丈夫だろう。

原因がヘッドギアであると考えた彼は特に気にする事無くゲームを続けることにしたが、一応機能の確認をするためにコンソール画面を基本動作で呼び出そうとするが……。

コンソールが……でない。

そう、彼がいくら手を動かしてコンソールを呼び出そうとするも全く反応がない。

「マジか!？」

コンソール画面が開けないという事はログインが出来ない!

それに緊急ミッションや宣戦布告された時の警告画面も出ない。

この状態で敵国に襲撃を受けたら対応に遅れてしまう!!

焦る彼は急いで廊下に出る。

すると……。

「ここに居られましたか!!緊急事態であります!!今すぐ会議室にお越しください!!暁の方々は既に会議室に待機しておられます!!」

声に振り返ると目の前には声の主、シズネ。が居た。

原作では綱手の一番弟子兼秘書役であり、綱手の借金やら綱手の起こすトラブルやらでかなり苦労をしている事で有名だ。

彼女はかなり急いで来たのか肩で息をしていて、額に汗も浮かんでいる。

おお!これが運営の言っていたアップデートか……

今回のアップデートでもっとも重要な部分。

それはキャラクターに人工知能をより人間らしくすることであったが……。

リアルすぎじゃね?汗まで出て、まるでリアルに居るかの様な錯覚がする。

前は軽い対応や簡単な会話だけだったのに……。

ゲームの規格外な進化に驚きと喜びを感じる彼は、時代はここまで来たのかと感慨深い気持ちでいた。

「どうかしましたか、バサラ様?っは!?!もしやこの異常事態にお加減が!？」

す、すぐに治療いたしますので服を脱いでください!!」

「大丈夫だ。早く会議室に行くぞ」

「そうですか?なら良いのですが……もし、体の調子が悪くなったら仰ってください。

私が全力で治療いたしますので」

「ああ、その時は頼むよ」

「は、はひ!!全力を尽くさせていただきます!!」

緊張して敬礼する彼女が微笑ましくなり、思わず顔が綻ぶ彼。本当の人間と接しているようだ。

ちなみに彼女が言った暁とは、原作とは全く関係ない名前だけを借りたもので、

俺を除く忍者で構成された国の幹部で俺のお気に入りだ。

暁は元々基本ステータスが高く、レアリティのランクが上位で一ヶ月に一度販売される課金アイテムによるステータスの増加や、元々覚えている固有の忍術以外の上位忍術を覚え、最高の戦闘力を個人で持つ最強の十人で構成されている。

そして、一人一人が部隊を持つ隊長である。

「バ、バサラ様。会議室まで、僭越ながら異常について報告します。」
「頼む」

「実は国の周辺地理が変化しているのです。」

我ら『日の国』は敵発見に優れた草原であつたはずなのですが……周りが森になっていました」

彼女の報告に思わず眉を歪める。

森のフィールドはかなり厄介な場所だ。

奇襲を受けやすく、敵の発見が見晴らしの良い草原よりも遅くなる。

下手をすれば城壁の耐久値をだいぶ削られたところで敵を発見という事にもなりうる。

「警備部隊の人員を増やす必要があるな」

「はい、そう思った九番十番隊の隊長であるお二方が、日向ネジと我愛羅の二名を小隊長に任命して警戒に当たっています。」

NPCの対応は問題ない、むしろ上出来の部類だ。

敵の搜索に白目を持つネジと砂を広範囲に広げて搜索する我愛羅。しかし自動で状況を判断して、部隊に命令をするなんて……。

ゲームはここまで進化したか……。

仮想現実をより現実……。

ダイブゲームのキャッチコピー通りだな。

扉の上に会議室と書かれた木の札が張つてある扉。

どうやら会議室に着いたようだ。

「では、私は一番隊に戻りますので、これにて失礼します」
「わかった」

頭を下げ所属する部隊に戻るシズネの背中を見送った後。

俺は目の前の扉の取っ手を掴み……

扉を開けた……。

大きな長方形のテーブルに十一の席。

一番奥の席以外には、俺のよく知るキャラクター……いや、女性達
が自分達が座るイスの傍で立って居た。

俺は、仮想現実で座りなれた一番奥の席向かい、イスを片手で引い
て座る。

すると、それを合図にイスの傍に居た彼女達もイスに座った。
さて、ある程度の情報はシズネから聞いた。

後は各部隊の現状や里の状況、今後の事について確認しよう。

「里の外については、知っている。まず、各部隊の現状を一番隊から聞
こう」

「はい」

返事と共に席を立ったのはナンスバデイの金髪美女。

原作・アニメで有名な5代目火影、綱手だ。

ただし彼女には額のマークはない。

そう、なぜなら彼女は雑誌を購入して手に入るシリアルコードを入
力してゲット出来るシークレットレア、大戦時代の綱手なのだ。

ゆえに肉体も原作のような若作りではなく本物の若い肉体である。

「一番隊は現在、奇襲により出るけが人の治療に備えて後方に待機し
ています」

一番隊は戦闘の際にけが人を治療する治療班と治療中に敵から守
る二つの班に

分かれている部隊である。

綱手の報告が終わり、席に座ると膝まで届くほどの超ロングヘア
と、綱手にはない妖艶さを持つ

美女が席を立ち、報告を始める。

「二番隊は現在、里周辺に注意を払いつつ、万が一に備えて罾の設置などの侵入者対策を行っています」
照美メイ。

原作では5代目水影で年齢や婚期に敏感な事で有名な女性で血継限界である溶遁・沸遁の使い手。

拠点防衛部隊である二番隊の隊長している。

おお！このアップデートに何度驚かされたか分からないが罾の設置までやってくれるとは……。

本当の人間のようなのだ。

彼女の報告を聞き終え、次の女性が立ち上がる。

「三番隊は現在、攻撃命令が下るまで戦闘準備をしつつ、待機しております」

パクラ。

原作だと、穢土転生によつて蘇り、カブトのコマにされた大勢の忍の一人。

血継限界の灼遁の使い手。

ナイスバディのその容姿はネットでも色々と囁かれている。

彼女は火力特化の突撃部隊である三番隊隊長であり、その実力を隊員と常に戦場で発揮して来た。

肩や背中を大きく露出した非常に扇情的な忍衣装がたまりませんなあ。

うん！実にけしからん!!

報告が終わり、次の女性が立ち上がる。

「四番隊は現在、三番隊と同様に命令が下るまで待機しております」

夕日 紅

原作ではヒナタ・シノ・キバの担当上忍。

幻術の使い手であり、疾風伝の妊娠発覚でファンが軽く涙したとか……。

ちなみに今俺の目の前に居るのは、ヒナタ達の担当上忍をしていた若い紅であり、もちろん妊娠なんてしていない。

彼女の部隊は幻術を使い、敵の部隊を混乱させ部隊を孤立させたり孤立した

敵を戦場で捕獲、および情報を吐かせたりするのが仕事だ。

彼女の報告が終わり次へと進む。

「五番隊は現在、三番隊および四番隊と同様に待機状態となっております」

みたらし アンコ

彼女もまた先程の四人と見劣りする事の無い美女で原作では大蛇丸の元弟子。

超甘党で、大蛇丸同様に大蛇を口寄せし、それを用いた術を使う。

潜入・暗殺などを行う五番隊の隊長である。

ジャケツトの下に見えるお乳様がベリーグット!!

デブったあんこは認めない！絶対にだ!!

彼女の報告を聞き終えると、また次へと進む。

「六番隊は現在、活動している三部隊の連絡を円滑に行いつつ、

九番隊が集めた情報を後に、書類でお渡しするのでバサラ様自身の眼で御覧ください。」

「わかった」

サムイ

金髪の美女で原作ではオモイ・カルイとともにスリーマンセルを組んでおり、小隊長として、

協調性のないオモイとカルイを上手くなだめつつも率いている。

その名のとおり、クールな女性。

肩こりに悩んでいるらしいが、あの巨乳を見ると納得してしまう。

彼女の率いる部隊は、通信を専門とする六番隊で俺の命令を各部隊に情報を

伝えたり、調査部隊が手に入れた情報を俺に伝える部隊である。

これだけ聞くと弱い部隊の様に聞こえるが、そんなことはない。

六番隊は情報を伝える速さや情報を守り抜く強さが求められる為、弱いなんて事は

絶対はない。

さて、彼女の報告が終わり次の隊の報告が始まる。

「七番隊は現在、九番隊と我が隊でも索敵が行える隊員が広範囲で索敵を行い

つつ、敵国が我が国に攻撃を開始した場合に即、広範囲攻撃で殲滅出来るように

城壁で待機しております。」

テマリ

原作では、いつも背中に身の丈ほどある扇子を背負っており、戦闘時には扇子で風を巻き起こして戦う風遁忍術の使い手である金髪美女。

ちなみに、ここに居るのは疾風伝のテマリである。

彼女の部隊は広範囲に攻撃し、一気に弱った敵を殲滅する部隊である。

テマリの報告が終わり、次の報告に移る。

「八番隊は現在、九番隊のサポートをして情報を集めています」

山中 いの

ポニーテールが特徴で金色の髪に青色の目を持つ美少女。

得意とする術は、山中一族に伝わる忍術・“心転身の術”で敵や動物の心に入り込み、肉体を操ることができる。

彼女の率いる八番隊は他部隊の補助やサポートである。

戦場では時には医療・潜入・通信・情報収集などを行うオールラウンドに

活躍している。

彼女の報告が終わり、次の部隊長が席を立ち報告を始める。

「九番隊は現在、七番隊の隊員と共に広範囲索敵で国周囲の地形と情報を収集しています」

日向 ヒナタ

ナイスバディのロングヘヤーの美少女で一族に伝わる血継限界“白眼”と、

それを応用した体術“柔拳”の使い手である。

原作では忍の信念にナルトに強い影響を受けていて、彼同様「まっすぐ自分の言葉は曲げない」ことを忍道としている。

そんな彼女が率いる部隊は、調査部隊である九番隊。敵の索敵から、特徴・敵部隊の規模・地図の作成などを行う。

人気投票では世の男たちが女性ランキング一位にするマドンナである。

彼女の報告が終わり、最後の部隊報告に移る。

「十番隊は現在、施設が正常に機能しているか確認しております。

確認が終了しだい七番隊同様に書類を製作いたしますので後でご確認ください」

「わかった」

シズカ

黒髪ポニーテルの美女で女性ばかりの忍者の里・撫子(なでしこ)の里の

次期里長。

彼女の率いる十番隊は戦場では遊撃、国に居る時は内部調査などを行っている。

内部調査はスパイの殲滅や好感度の低い忍者が賄賂などで離反しないよう調査する。

大和なでしこな感じとぴちぴちした忍び装束がいいNE!!

AVで活躍する退魔な忍びを思い出しそうだ。

これで全ての報告が終了した。

後は今後の事について話さねばならない。

1話

「さて、これからの事だが……」

あれ？命令コマンドが出てこない……。

彼女たち幹部に与える情報収集、防衛、攻撃などのコマンドが現れない状態に眉を顰める。

俺が口を開いた状態で固まっていると彼女達の真剣な眼が集中する。

そんなに見られると緊張してくるのだが……。

……これって本当にゲームの中なのか？

それとも寝落ちした？

彼女たちに視線をちらりと向けるが、さつきと同様に真剣な瞳が俺に集中している。

なんか、針の筵（むしろ）みたいで嫌な気分になった俺は口頭で命令することにした。

「まずは、情報収集に専念したいと思う。」

あれ？忘れてたけど任務を与える指名コマンドもでない……。

本来は命令コマンド↓任命コマンド↓小隊編成↓命を大事になどの方針。

となるはずなんだけど……。

ま、まさかね？ただのリアルを追求したアップデートの効果だよね？

リアルに近づけた、だけ……ですよね？

「そこで……ヒナタ」

「はっ」

疑念がかなり大きくなるが、ここがゲームの中であろうと現実であろうと、とりあえず情報を集めるのは重要なのでコマンドで選択する物を口頭で伝える事にした俺は声を出しヒナタの名前を呼んだ。

名前を呼ばれたヒナタが返事と共に立ち上がり、俺を見つめる。

抑え込もうとはしているようだけど、白い頬は朱に染まり、体が少

しモジモジと動いている。

おっぱいも動きに合わせて揺れている…マーベラス……。

「これから、六番隊から緊急連絡用に一人と九番隊から少数精鋭を選び、調査小隊を結成した後、

小隊と共に地上の周囲半径一キロ圏内をくまなく偵察し、地図を作成して欲しい。

それと戦闘は出来る限り避けて欲しいが、必要と感じた時には許可する。

小隊の人選は一任するが、優秀な者を選べ。最後だが…けつして無茶な事はせず、小隊と共に生きて帰って来い」

「はい…了解しました」

「サムイ。連絡役は優秀な奴を頼む」

「了解しました」

了解の返事をするヒナタとサムイ。

戦闘能力や白眼の事を考えるとヒナタ一人でも出来るのだろうか彼女よりも強い忍びを斥候として放っている国が存在するかもしれない可能性がある為、用心は必要だ。

「命令がなく、待機している部隊は一番隊・十番隊の補助を頼む」

「……了解しました……」

「では、これにて解散とする。」

「……はっ！……」

返事と共に瞬身の術で姿を消す女性達。

どうやらうまく出来たようだ。

さて……。

会議室でボツチとなった俺んだけど……それどころじゃない。

会議室を飛び出し、走って自室に戻った俺は、もう一度コンソールを呼び出そうと手を動かす。

だが、先ほどと同じようにコンソールは表示されない。

コンソールが表示されないとログアウトが出来ない。

つまり、仮にここがゲームの中であつたとしても俺は戻る事の出来ない監禁状態に置かれていると言っても過言ではない。

そして現実であったのなら、俺は二度と現代社会に戻ることは出来ないだろう。

……………。

……………。

……しかし……。

監禁状態、もしくはは一生戻る事ない現実に焦りはしたものの、俺は思っただのだ。

安いアパートの一人暮らし……しかも独身で彼女も居ない……。

おまけに会社はブラックに近いグレーと来た……。

リアルでの自分を思い出すと正直、リアルに帰りたいたいという意欲が下がる。

むしろ、現実よりもここで何事もなく平穏に自分のお気に入り(女性キャラ限定)と死ぬまで戯れていた。

よし!ゲームでも現実でも、もうどうでもいい!!どうにでもなっちまえ!!

楽しんだ者の勝ちだ!!

彼女のいない現実よりも好感度Maxの仮想の美女・美少女を優先し、あっさり現実と決別した俺はこの状況を楽しむ事にした。

そうと決まったらさっそく、街に行つてNPC達の様子を見に行こう。

NPC達もリアル化されているだろうし、どんな反応をするのか楽しみだ。

さっそく、出発だ!!

ここ日の国は大まかに商業地域・農業地域・軍事教練地域の三つに分かれており、それぞれの地域でNPCや忍者達が日々の生活を送っている。

商業地域には食品から忍具等の武器と防具、家具や電気製品、果ては建築など様々な商品や建造物が開発と販売がされている。

開発される商品はNPCの職人たちのレベルと施設のレベルによつて向上してする。

農業地域は水や食料を生産している地域でNPCの農家と忍者が

働いており、同じように軍事教練地域でもNPCや忍者達が働いている。

俺は新しい忍具やスキルである忍術の入った巻物が売られていないか見る為に商業地域へと向かった。

「おお！ バサラ様ではありませんか！！ 緊急事態にわざわざ視察していただきありがとうございます！！」

「バサラ様！！ 商店街は派遣していただいた忍達のおかげで問題ありませんぜ！！」

城から飛雷神の術を使用して商店街地区に飛ぶと、俺の姿を見た住人たちは笑顔で歓迎してくれる。

国民である彼らNPCも忍者同様に重要な存在である。

彼らが居るから戦争に必要な資金も税として集める事もできるし、施設のレベルや職人のレベルにも依存するが忍具に武器や防具も生産してくれる。

そして、軍事教練の施設のレベルによってアカデミーに入学できるNPCは変わってくるが、入ってくれば入学したNPCは教員として配置された忍者のレベルに合わせて名もなき忍者、下・中・上となつて卒業し、戦場で扱うことができる。

故に、彼らの事は定期的に視察したりして、住民たちの不満を聞き、クエストとして忍者達もしくは自身で問題解決に当たらなくてはならない。

仮に、彼らの不満が高まれば問題を解決しようと、どこぞのキムチ国のようにデモが発生し、あらゆる産業が機能を停止し、彼らの不満を解消する為にクエストに走り回らなくてはならなくなる。

そうなってしまった場合、国を守る為に動ける忍者が激減し、敵国に襲撃を受けやすくなるのだ。

俺は彼らに対してほどほどに挨拶し、武器屋に向かった。

武器屋に入ると商品である多種多様な忍具に武器が値札と共にあちらこちらにケースの中に保管されている。

俺が入店すると店長である厳つい親父がカウンターからこちらに向かつて話しかけてきた。

「大将じゃねえか！ この大変な時にこんな俺の店に来て大丈夫なのか？」

「まあ、優秀な部下達に任せてるから大丈夫だ。 それよりも、新しい忍具出てる？」

「…暁の嬢ちゃん達に丸投げかよ。 まあ、大将が大丈夫って言うなら大丈夫なんだろうが……。」

とりあえず新しい忍具だったな？ 最近大将が施設に開発資金を多めに投入してくれたおかげで、すごいのが出来てるぜ」

厳つい店長は、店の地下へと続く階段を下つていき新しい兵器を見せてくれた。

そう……。

「どうよ！ 大軍兵器『メカナルト』と対城兵器『メカ九尾』だ!!」

男のロマンであるロボットを……。

い、いらねえー。

敵国の忍者だけでなく世界観までも破壊しそうな兵器に啞然としながらも俺はキラキラした瞳でこちらの反応を伺っている店長に言った。

「廃棄するか、ここに封印しろ」

「な!?! 大将これは男のロマンですぜ!?! 目から発射されるビームに腕にはミサイルとガトリングとライフルが搭載されていて、音楽だって流せるんですぜ!!」

俺の言ったことが信じられないと言った表情で店長がメカナルトの鼻を押す。

すると……。

『でっかく生きろよ ○なら! ○道それずに 真っしぐら! ♪』

大音量で歌と音楽が流れるが……作品が違う!!

ロボットアニメで声が同じだからって……運営は許可を得ているのだろうか？

運営が著作権によってハチャメチャが押し寄せてこないか心配になる。

「もうちょつと普通のはないのか？」

「しようがねえな……だったら……」

しょんぼりした店長に次に見せられた物は刀やら新型の粘土爆薬。とりあえず、最新の刀である『草薙の剣+120』を購入して装備した。

値段は300万両と高めだったが今まで装備していた『草薙の剣+47』を売却した後で購入したので、安く購入出来た。

さて……早速、演習所で刀の調子を見てみるか。

……。

商店街地区に飛んだと同じように飛雷神の術で軍事教練地域の演習場地区へと飛ぶ。

術が成功すると視界には森が広がっていた。

本当に飛雷神の術は便利だ。

レベルを上げてガチャを回し、修行ミッションをクリアする事でようやく習得した物だけにあの時間と金は無駄でなかった事が実感できる。

さて、始めるか。

腰に差した刀を鞘から引き抜き片手で目の前の大木を斜めに一闪。

刀身が標的である木に当たった瞬間、まるで豆腐かプリンを包丁で切ったように殆ど抵抗感なく切り捨てる事が出来、刀を振り切つて数秒するとゆっくりと木は地面に倒れた。

中々の切れ味だ……。

切れ味を確認した後、チャクラの通し具合を見る為に雷を刀に流すイメージを行う。

しかし、ここでいつもと違う現象が起こる。

「発動している……」

イメージを行った瞬間、刀にチチチと言う音と共にバチバチと電気を纏ったのだ。

ゲームにおいてこの現象はおかしい。

何故なら、発動のキーワードである術名を言っていないのだ。

本来ならイメージでゲームのギアが読み込む↓忍術名を口にする↓発動という流れだ。

基本バトルのシステムが無視されて発動されるのはやはりおかしい。

この疑問は俺の中にあつた『ここは現実説』が完全になつた瞬間であつた。

2話

「我々、調査部隊はこれから里より半径一キロの地図を作成しつつ、我々以外の勢力を発見しだい、情報を収集します。」

もし、戦闘が避けられない場合は敵を無力化しつつ後退しますが質問はありますか？」

「……」

ヒナタが選んだ忍達に任務の内容を説明するヒナタ。

集められた隊員たちは、彼女の話を黙ったまま一言一句聞き逃さないように

五人と一匹は真剣に耳を傾ける。

「質問が無いようなら、これより出発します。」

「いいですね？」

「……はっ……」 「アン！」

隊員たちの返事と共に開かれた門から跳躍し、木から木へと飛び移りながら

移動を開始した。

「なあ、シカマル……。お前は今回の事をどう思う？ 暁のヒナタ様が出るほどヤバいのか？」

移動を開始しする前から、今回の異常事態に不安を覚えていたキバは自分より頭のいいシカマルにこっそりと質問した。

「そりゃあ、相当ヤバいだろう。これは予想だが、国はおそらく時空間忍術の類で飛ばされている。」

そんなことが出来るのは、小国を一人で相手に出来るうちの大将とタメを張れる化け物だけだ。

その化け物が忍術で飛ばしたと仮定すると、目的は自分たちの近くに居る日の国が邪魔になったから単純に遠くに飛ばしたか、日の国を潰す為の作戦でここに飛ばしたかのどちらかの可能性が高い。

一番安心出来るのは前者とたまたま日の国が実験にされたってのだが……そんな事が出来る化け物が居るって事実はかなりめんどくせえ。」

尋ねられたシカマルはめんどくさそうにしつつも、分かりやすくキバに自分の考えを説明した。

なまじ、頭がよく具体的に想像できるシカマルはキバよりも不安は大きかった。

そして、彼の頭の中では仮想の敵が現実に居る場合かなりの被害が出ると想像できるのだ。

まあ、そんな敵はもちろん存在しないのだが。

シカマルの胃はゆっくりとダメージを受けていた。

「確かにそんな化け物が居たらかなりヤベエつてのは分かったけどよ……俺はうちの大将もあんまり変わらねえと思うぞ？」

この時、キバの言葉を聞いたシカマルは楽観的なキバをとてもし羨んだ。

偵察小隊が周辺を搜索を開始した頃、バサラは自身のアバターの差異について調べていた。

「写輪眼。パネエ……」

写輪眼うちは一族の血継限界。

レベルが一定数を超えないと購入とアバターにカスタマイズすることが出来ない。

そして、更にレベルを上げて特殊クエストをクリアすることで万華鏡写輪眼が使用可能になる。

ただし、原作でもあったように使用すると一定時間視力が悪くなり同レベルの戦いだと大きな隙となる。

その隙を埋める為に出てきたのは……永遠の万華鏡写輪眼だ。

これもまた、運営公式ホームページで発表される自身のアバターと国のレベルを一定にしないと購入できない仕様となっており。

アバターがLVMAXの限界突破になると課金で購入可能……

特殊クエストをクリアすることで片方の目が輪廻写輪眼を使えるようになる。

その能力はまさにチート。

ただ、廃人＋廃課金のプレイヤーにとつては標準装備であるので上級者との戦争において優位性はあまりない。

そんなチートな写輪眼さんはすごかった……。

たまたま見かけた教練所で修行しているNPCのくノ一達の胸の動きを完璧に捉えられるのだ。

右目の永遠の万華鏡写輪眼・左目の輪廻写輪眼が右へ左へと揺れるオツパイの動きを補足し、次にどんな動きをするか予想する。

ビバ・写輪眼！

しかし……その喜びも途中から血の涙が出るのではないか、と思うほどの激しい後悔に塗りつぶされた。

俺は……俺は何故、白眼にしなかった!!

白眼は遠くを見通し、服の中を覗ける透視能力を秘めた覗きの最強瞳術!!

※違います。

もし、過去に戻れるのだったら俺は写輪眼を選ばず白眼を確実に選んでいられるだろう。

……。

あれ？俺ってかなり余裕あるのか？

オツパイは好きだが、普段からは考えられないテンションに気づく俺。

おそらく自身の持つゲームか漫画の世界でしか許されない強力な力のお陰で安心感を得たのだろう。

自身の感情に納得していると一人の男が現れた。

「おやおや、これは大将殿。先ほど森で響いていた轟音は貴方でしたか……。」

「自来也か……何の用だ？」

現れた男は、伝説の三忍である自来也。

彼はアカデミーの教師として配置してあったが、現実となった今は警備もしてくれているようだ。

しかし……何故、彼は肩に望遠鏡を担いでいるのだろうか？

「いやなに、ワシはこのアカデミーの教官ですので生徒たちの安全の

為に異常を調べていたまで。

何事もないようでしたらその場所を変わっていたただけませぬか？

その位置はワシが見つけたベストポジションゆえ……」

彼の働きに感心していたが、彼らしい最後の言葉で台無しだ。

俺も人の事は言えないが、望遠鏡を持ってまで覗きに來るとは……。

彼の覗きに対する本気度にあきれながらも気持ちは分かるのでどいてやると、彼はせつせと望遠鏡を組み立てニヤニヤと望遠鏡を覗き始めた。

まあ、俺は十分自身の事を確かめる事が出来たのでこの場を退散した。

この後、太陽の光に反射した望遠鏡のせいで自来也は血祭にされるのだが、この時の彼は揺れるオツパイとスパッツに包まれたお尻に夢中となっており、想像すらしていなかった。

そして自来也が血祭になっている頃、ヒナタ率いる小隊は森の中にある村を発見していた。

「耳の長い金髪の人たちが生活しているみたいです。」

「では、さっそく心転身の術で情報を探ります」

白眼で村と長い耳が特徴の村人を確認し、接近したヒナタ達。

術の効果範囲に入った、いのいちが印を組んで一人でうろついている村人の男に術を掛ける。

金髪の男の中に侵入した、いのいちが男の……ホドリユウの記憶を読み、驚いた。

精霊と呼ばれる自然エネルギーの結晶体を扱う術に、自分たちとは違う言語。

人に見えるがエルフと呼ばれる長命種、亜人と亜神。

大陸を支配する帝国と呼ばれる国家。

忍者も自国と同等の力を誇った国家も存在しない。

ここは、自分たちが知る世界ではない!!

今すぐ、本国に伝えなければ!!

ホドリユーの記憶を見た、いのちは術を解除して真っ先にヒナタに情報を伝えた。

いのちが収集した情報を聞いたヒナタはサイにこの情報を伝えるように命じた。

3話

日(ひ)の国の中心に存在する城では一人の男がプレイヤールームで装備を選んでいた。

運動したこともあり、ぶつちやけ暑いので装備を変えようと衣装室をあさっているのだが、中々いいの見つからない。

うちはマダラの甲冑や二代目火影の戦闘服にサスケの着物、後は黒いジャケットや黒いスーツなどの趣味全開の服ばかりだ。

一部を覗いて見事に黒一色である。

一通り装備をあさったところで、一番無難そうな黒の長ズボンと黒いシャツを選択して着替えて、設置されている鏡で自分を見る。

ふむ：これは中々ではないだろうか？

黒いシャツとズボンを装備した、黒いストレートの長髪と切れ目のイケメンが立っていた。

ぶつちやけ黒い髪のセフィロスさんかな？

我ながら中二心に溢れている。

試しに決めポーズをやったりしていると、扉からノック音が鳴った。

恐らく、サムイが報告書をまとめて持ってきてくれたのだろう。

「こちらが報告書になります。」

「マジか……」

プレイヤールームの書齋にサムイをベットではなく書齋に招き入れた俺は、ヒナタの報告書を受け取ると急いで目を通す。

そこには驚愕の事実が掛かっていた。

この世界には獣人やエルフと言った亜人が存在している。

まさに衝撃だった。

帝国とか文明レベルがどうか、どうでもいい。

あの、空想のおとぎ話であったエルフが存在している上に、ケモミミ娘が存在する事実。

俺の中では今日はクリスマスと正月と誕生日が同時にやってきた

ような感覚である。

俺はお祭り気分、報告書に添付されていた地図を見る。

日の国場所はアルヌスと呼ばれる丘の南の森に存在し、すぐ近くにエルフの村と人間の村：『コダ村』があつて村のすぐ近くの街道を西に向かうとイタリカと呼ばれる亜人たちが多く生活しているフォルマル伯爵領があるらしい。

ムラムラが……いや、ワクワクが止まらねえ!!

「駄目ですよ」

「……」

桃源郷を夢見ていると、サムイの冷静な声に釘を刺されてしまう。

ちよつとくらい駄目ですかねサムイさん？

「万が一の為に、最低でもバサラ様が行くのは潜入部隊を編成し、情報と安全を確保してからです」

「そんなに危険なのか？」

「この世界には忍術はなくとも、魔法や精霊魔法と呼ばれるものが存在しておりますので可能性はあります。」

「それに、仮にですが……我々以外の国がこの世界に来ている可能性もありますので」

確かにそうだ。

この世界に来たのは俺だけというのは都合が良すぎる。

サムイの言う通り警戒すべきだが……エルフ、見たいなあ。

「……では、今後の為に語学を帰還したいのいちから学んで下さい。

彼の術なら脳から直接学べます。…もし、早く語学を習得されましたら護衛付きではありませんがお好きにしてください。

潜入部隊は私が編成しますので。」

サムイのお許しの言葉を聞いた俺は速攻で部屋を飛び出し、いのいちを探した。

――。

同時刻、バサラと国の為に帝国とイタリカに潜入する忍者達がい

いちのから伝心された異世界の言語を習得し、目的地へと向かって行った。

イタリカ潜入班うちはイタチ・薬師カブト、ペア。

「まさか、僕と貴方が組むことになるとは思いませんでしたよ、イタチ」

「……喋っていないで行くぞ。イタリカはバサラ様が行きたがっていたらしい、故にさっさと情報を収集する」

「分かった……分かったから、その写輪眼で威圧するのはやめてくれな
いか？」

帝国潜入班、桃地再不斬・白、ペア。

「再不斬さん、嬉しそうですね」

「『悪所』だったか？ 場合によっては支配しても問題ない掃き溜めだそうだからな。」

久々に楽しめそうだ」

「……女子供は殺してはダメですよ。バサラ様に……いや、暁の皆様に殺されます」

「分かっている。大将は甘いからな」

こうして、少数精鋭の怪物たちがイタリカと帝国に放たれた。

――。

イタチ カブトの二人は服を扱う旅の商人としてイタリカに潜入した。

「まさに異世界だね。報告通り住民は異種族が多くて文明は低い、建物はコンクリートを必要としない木材と石だ。」

僕らの日の国と比べるまでもないね」

「……思っただけでも口に出すな。万が一にでも聞かれたら面倒だ」

二人は穀倉地帯を歩きながら周りを観察し、報告書の内容を確認するように村を見たり、通りかかった住民の話を聞きながら情報を収集する。

「へえ、二人旅なのかい？二人でここに来るまで盗賊に襲われずに来られたとは……君たちは運がいいよ」

「ははは、そうですね。運がよかったみたいです。ところで盗賊ってよく出るんですか？」

「ああ、ここは帝国でもっとも重要な穀倉地帯だからね。帝国に出荷する食料を狙う輩が隙を伺っているのさ。」

でも、受け取りに来る帝国兵が守ってくれるから、近くに出てくるだけで襲っては来れないんだ。

まさに帝国兵様様さ、でも…帝国兵が守るのはあくまで食料だけで、君たちみたいな商人は助けてくれないんだ。

今後どこに向かうかは分からないが、ここから出る時は護衛を雇うことをお勧めするよ」

「ありがとうございます。大丈夫ですよ、僕たちはこう見えてかなり強いんです」

「へえ…そうは見えないが……商人になる前は兵士か傭兵だったのかい？」

「まあ、そんな感じですよ」

必要な情報を会話を通して収集するするカブトと親切に話してくれる農家のおじさんの話を聞いていたイタチは物流について質問した。

「兄ちゃん達は勉強不足だな……ここイタリカは穀倉地域だけど大商會もあつて各地の品を取り揃えていて品ぞろえの良さは帝国の次なんだぜ。」

まだまだ若いなあ、と若干呆れつつもおじさんは大商會に関して簡単に説明してくれた。

ただ……しばらく自分の故郷を自慢げに話すがとある青年への嫉妬話になったのを境に、これ以上は無駄と判断したイタチが写輪眼で男の瞳を見つめる。

自慢げにしゃべっていた男は目の前のイタチの目が赤くなった事に驚いたと同時に、幻術を掛けられた事で驚愕の表情は人形のような無表情へと変化する。

「……初めから写輪眼を使って質問をすればよかつたじゃないのかい？」

お陰で、ニコラって青年に美人の恋人が出来たことに関する嫉妬話まで聞いてしまったよ」

「魔法とやらで幻術が効かない可能性があつたからな。とりあえず隙を見て幻術を強めに掛けたのだが……すんなりと掛かつた。

これなら今度は写輪眼で相手の記憶情報を収集できるか試してみるか。

成功すれば俺よりも強力な瞳力を持つバサラ様の役に立つはずだ。」

「ははっ、イタチ君は僕の話を知っているのかな？僕は謝れって言つてんだよ。殺すよ？マジで殺すよ？ねえ？」

忠誠心溢れ、話を聞かないイタチと今にもチャクラメスで攻撃しそうなほど殺気立っているカブト達は、じゃれ合いながらも村人の男から聞いた大商会へと向かつた。

ちなみに、じゃれている道中で娯楽に飢えた腐った女子の皆さんから妄想のネタにされたのは余談である。

4話

「……この服を税を引いたデナリ銀貨70枚で買わせていただきます」

「いいだろう」

大商会の一室にて取引を完了し、滞在する為の資金を手に入れたイタチとカブト。

ただ問題があるとすれば、服の買取をしてくれる取引相手の瞳が虚ろだったりすることだろうか？

「……僕は今後、写輪眼を持つ人間とは取引しない」

「何をいつている？相手の記憶を読み取り、安く買ったたかれないように適正価格で取引しただけだが？」

確かに商人リユドーの言っていた情報が本物であるなら適正価格だ。

しかし……なんとも言えない気持ちがカブトの心に渦巻いていた。

金を受け取った二人は大商会を出て宿へと向かった。

「それで……今後の予定はどうするんだい？僕としては調査を打ち切りにしても問題はないと思うよ。」

商会の商品として部屋に展示されていた雑な出来の剣と槍と鎧……アカデミーを卒業したばかりの忍にだって危険はないと思うよ」「……そんなのは兵の力量によって大きく変わる。結論を出すのは物資を護衛する帝国兵を見てからでも遅くはない」

「嘘だね。君……何を企んでいるんだい？」

何百年と生きたエルフの情報からこの世界の脅威となりうる存在のリストが存在する。

その中の順位は帝国・王国の兵↓魔法使い↓エルフ↓亜神↓神となっている。

リスト最下位である人間の兵士など、イタチを含めカブトが言ったアカデミー卒業生の敵ではない。

それ故にカブトは、そんな弱い存在を気にかけているフリをしながらイタリカに残ろうとしているイタチを怪しんだ。

もちろん、忠義の塊のようなこの男が主であるバサラを裏切るような事はしないと確信しているが、不安はある。

カブトの疑いの視線を受けたイタチは周りを警戒しながら自分の考えを口にした。

「商人の記憶を見た時、帝国の性質を理解した。

もし、帝国の貴族や皇族が日の国の存在を知った場合、確実に戦争になる。

そうなった時、穀倉地帯を真つ先に陥落させたら早く戦争が終わると思わないか？」

「……全く、本当に忠義者だよ君は……」

「そうか？俺はここに着てからずっと片手をポケットに入れて、休まず情報を記録しているお前が忠義者だと思うが？」

「……そこは気づかないフリをするのがマナーだよ」

お互いにニヤリと嗤った二人は、有事の際にイタリカを支配するための下地をどうするかを話し合った。

――。

「潜入して一日で五回の襲撃とは……悪所とはよく言ったものですね、再不斬さん」

「……見事な吹き溜まりだが……雑魚ばかりで大したことはないな」

悪所に潜入した二人は、外から来たものとしての礼儀を教えてやると言われて戦闘。

金を出せと恫喝されて戦闘。

白を女と勘違いした男たちに女をよこせと襲撃され戦闘。

返り討ちにした連中が顔役の部下という事で報復に二回。

まさに、帝国のごみ溜めと呼ばれるのに相応しい治安の悪さである。

「……面倒だ。このまま頭を取に行くぞ」

「その意見には賛成したいのですが……混乱や反乱が起きますよ？」

「…歯向かう奴らは、皆殺しでいいだろう？俺が選ばれたのはそういう

う事だと判断しているが?」

「ほどほどにお願いしますね? やり過ぎた場合は僕が貴方を始末しなくてはならなくなるので」

「フン…大将の意向には逆らわないから安心しな」

亜人・人間を含む、五十もの首のない死体をまたぎながら悪所の顔を抹殺する為に彼らは監視者の後を追った。

所変わって、悪所の顔役ベツサーラは外から来た二人組に顔に泥を塗られたと怒り、あらぶっていた

「ふざけるな! このベツサーラ一味に手を出して未だ生きているってどうゆう事だ!!?

テメエら…俺をなめてんのか?」

「俺達はふざけていませんぜ!! あいつ等…特にでかい剣を持つてる男は異常だ…人種の姿をしていたが…ありやあ、化け物ですぜ。」

「そうですーアイツ…笑いながら部下の首を…うげえ」

憤慨するベツサーラに報告する二人の男たち。

二人は遠くの建物で二人組を監視していた為、トラウマ必須『再不斬の殺戮ショー』を目撃してしまったのだ。

襲う五十人ものならず者達をまるで作業をするように首を飛ばす鬼と表情を変えずに殺戮ショーを鑑賞する少女。

二人が通った道は真っ赤に染まり、生者なし。

悪逆非道で有名なベツサーラ一味の男たちも恐れ戦く所業であり、部下の全滅を報告することを免罪符にベツサーラの屋敷に逃げてきたのだ。

「つち、腰抜け共め…こうなったら俺が直々に、その二人組をぶつ殺してやる」

「もう、やめやしよう! あの二人にこれ以上手を出したら…」

「ほう、俺達をぶつ殺す? それは面白い冗談だなあ…」

剣を腰に差し、重い腰を上げて立ち上がったベツサーラと報告に来ていた男たちは謎の声に振り返ると……。

そこには巨大な剣を血に染めた鬼が居た。

染められた血は新鮮なものの様で、剣からポタポタと床に垂れてゆつくりと絨毯にシミを大きくしていく。

恐らく侵入する時に屋敷に居るベツサーラの部下を殺したのだろう。

報告に来ていた二人は自分たちも生首にされると恐怖に戦き、ガクガクと震えながら腰を抜かすと同時に失禁した。

「き、貴様ーどこから入って来た!!？」

「おいおい……。これから死ぬ奴がそんな事を気にしてどうするんだ？」

「ぬかせ!!このベツサーラをコケにした罪を教えてやるぜ!!」

「お前ごときが……。この鬼人に叶うわけないだろう」

腰の剣を引き抜き、勇ましく吠えたベツサーラ。

だが、ベツサーラ一味の頭目である彼は特に何も出来ずに死んだ部下達同様、『首切り包丁』によって生首となった。

頭目が死に、恐怖で縄張りを支配していたベツサーラ一味は壊滅……。

ベツサーラが所有する縄張りを丸ごと鬼が支配する事になった。

そして、再不斬はベツサーラの部下だった男達を雇って自分がベツサーラに成り代わった事を広めさせた。

こうして彼の所業である『首切り』と『鬼人』の名が悪所に轟いたのであった。

5話

帝国がゆつくりと支配されている頃。

異世界言語を心伝身の術で完全に習得したバサラの元に一人の亜神が現れる。

『日の国』周辺を警護していた忍びは後にこう語った。

—あれは完全無欠の空飛ぶ痴女であったと—

※（レレイ調）

「羽の生えた空飛ぶ痴女?」

「はい……」

エルフの村に思いを募らせているバサラの元にサムイが日の国始まって以来の珍事件について報告した。

クールなサムイが顔を赤くしているのを見てほっこりしつつ、報告に上がった痴女について考える。

痴女には青色の肌に頭部に角と背中に翼が生えており、白い服の様な物を着ているが下着が丸見え。

まごう事なき痴女であり、手には巨大な大鎌を持っているらしい。

バサラ自身はエロの塊で美少女や美女で乳が大きくくければ痴女だろうと変質者やヤンデレだろうと愛せる業の深い男である為、エルフよりも目の前のエロである痴女に興味が出ていた。

もちろんエロはエロとして別に危険度やスパイの可能性も考えている為、エロに興味ないと言わんばかりの真剣な表情をしている。

その為、サムイは目の前のバサラの下心に気づかない。

「エルフの村に行こうと思っていたが……空を飛ぶ女の素性が気になる。」

その女は今どうしている?」

「現在は日の国を離れたところから見ている状態です。」

敵かどうか分からないので現在は日向ネジの白眼と我愛羅の砂の瞳で対象を補足しています」

「対象を捕縛し、出来る限り無傷で連れて来い」

「はっ!!」

「主上さんに言われて来てみたが……なんだありや?」

空飛ぶ痴女として日の国を騒がせ一部を鼻血の海に沈めているジゼルは森にある一番大きい巨木の上から突如現れた異なる文明を持つ国を観察していた。

彼女がここに居るのは彼女の上司に当たる神……ハーデイの命令で、この世界の敵かどうかを知る為である。

この世界の敵であれば排除。

この世界を面白くするなら放置。

それがハーデイの考えである。

「堅牢な城壁だな……どうやって調べればいいんだ?」

しかし、残念なことにジゼルは本能に生きる動物の様な龍人で頭がよろしくない。

故に、調べようにも方法が思いつかないでいた。

「あー……めんどくせえ!!こうなったら正面から行ってやる!!」

しばらく頭を悩ましていたが、残念なことに何も思いつかなかったジゼルは男よりも漢らしく、正々堂々正面から行くことにした。

そんな残念なジゼルを捕縛する為に捕縛部隊が結成された。

メンバーは大蛇丸・ヤマト・我愛羅の捕縛に優れた三名である。

「あれが……空を飛ぶ痴女?縦に割れた瞳孔や肌に見える鱗を見たところ……爬虫類の様な」

「資料にあつた龍人だと思えますよ。」

「どうでもいい。さっさと捕縛するぞ」

正面から歩いてくるジゼルを視認した三人は気配を殺しながら、捕縛の準備を進める。

「ねえ……捕縛したらあの子をコッソリ少しだけ調べたいのだけどダメかしらね?」

人外を調べるのは、初めてなのよ……それに、あの子は特別な気がしてならないわ」

準備がほぼ完了する頃、いやらしい顔をした大蛇丸がジゼルの……龍

人の生態や仕組みを知りたい欲求から、二人に提案する。

大蛇丸はジゼルが巫神である事はもちろん知らない。

しかし、この男はオカマの第六感的なもので何かを察知していた。実に未恐ろしいオカマである。

「駄目に決まっている。もし、あの女に手を出したら反逆の臣として貴様を殺すぞ」

「あら、それは残念ね……あの子を調べれば面白い事がわかると私の直感がピンピンするのだけど」

我愛羅の言葉にあっさり引く大蛇丸。

彼の言った予感も欲求も本当だが、上からの命令に逆らうつもりはない。

ただ、言うだけ言ってみただけなのである。

「ふん。貴様の性質は分かっているが、冗談は時と場合を選べ」

半分以上は冗談であるだろうと分かっていた我愛羅は、一応大蛇丸に釘をさし、印を組んで作戦を実行した。

いろんな意味で知らないうちに危機を脱していたジゼルは捕縛地点に意気揚々と踏み込み、周囲の違和感に気が付いた。

400年以上を生き、数多の戦いを潜り抜けてきた彼女の戦士としての直感が彼女にささやく。

ここは危険だと。

ジゼルは持っていた身の丈ほどある鎌を両手で構え、いつでも飛べるように翼を広げ、周囲を警戒し、謎の敵に備える。

痴女のような恰好からは想像できない覇気と殺気をまき散らすジゼル。

しかし、彼女は選択を間違えた。

もし、彼女がこの時逃げる事を選択し、空に飛んでいたのだったら、ほんの僅かでも逃げ切れる可能性はあっただろう。

だが、彼女は逃げることはしなかった。

自身が不死身であること・400年生きた戦士としての自負が彼女の選択を誤らせた。

「な!!? なんじゃこりゃ!!?」

なんの前触れもなく、ジゼルの足元から湧き出てきてジゼルの体に巻きつくように成長する樹木と樹木の後を追うように拘束する砂。

そして、周囲から湧き出る大量の蛇・蛇・蛇。

拘束する樹木と砂を力技で破ろうとするもビクともしない。

「があああああ!!畜生!!放しやがれえ!!」

姿を見せない敵に吠えるジゼル。

そんな彼女を完全捕縛したと判断した三人はジゼルの前に姿を現した。

「貴様は何者だ?何故我が国を監視していた?」

「ふざっけんじゃねえぞ!!ヒトのオス共が!!この魔法を解きやがれ!!」

姿を現した彼らに悪態をつくジゼル。

その姿は、まさに檻に入れられた猛獣である。

「……言っているニュアンスはなんとなくわかるのだけど、彼女がなんて言っているのかまるで分からないわ」

「忍術を魔法と勘違いしていて、解けと言っている」

「へえ……って事は、魔法でも忍術と同じ事が出来るのかな?とりあえず回収班を呼ぶか説得しましょう」

時間の問題により、イタチ達潜入班同様に強力な心伝身の術によって異世界の言語を覚えた我愛羅が大蛇丸とヤマトに翻訳して伝える。

そして、ここから言語を習得している我愛羅が同行するように説得をするのだが……。

「黙れ、クソ野郎!!」

「誰がついて行くか!!ひよろ坊主」

などなど、悪態を付くばかり。

このままだと罅が明かないと回収班を呼ぼうと我愛羅が判断しようとした時。

事態は一変した。

そう……。

ジゼルに説得を試みていた彼らの前に、自分たちの君主、しかも戦装束をした忍の王：バサラが頭上から降って来たからだ。

彼らの前に着地したバサラは、肌に刺すような鬨気を周囲にまき散らし、写輪眼特有の赤き瞳はジゼルが『お姉さま』と呼ぶ亜神を思い出させ、心の奥底まで見られているのではないか？と思わせるほどの強者の貫禄と畏怖を感じていた。

まあ、肝心の本人は……。

砂が邪魔でおっぱいが見えぬ!!!

とジゼルをガン見しているだけだった。

6話

遠見の水晶。

初期プレイヤーに支給されるCランクのアイテムで敵の発見、および国内の観察に使われるアイテム。

白眼を持たないバサラはこれを使用して、捕縛チームとジゼルの様子を見ていた。

しかし、大蛇丸の発言で人体実験や同人誌的なヤバイ展開とエロい展開を映画と薄い本などの知識で妄想し、色々な意味で危険だと判断し、覗きを中断。

バサラは最高ランクの装備である赤い甲冑を装備し、高速移動で捕縛チームの元に降り立ったのである。

ただ、降り立った時にジゼルのおっぱいに写輪眼でガン見してしまったのはオツパイ星人の悲しい習性だった。

しかし、このバサラの悲しい習性が思わぬ発見をし、バサラは目を鋭くさせた。

「な……なんだよ？俺を殺すのか？」

写輪眼はチャクラを色で判別する能力がある。

ゲームでもその設定は生かされており、水遁は水色・火遁は赤・木遁は緑・雷遁は黄色……などなど術者が術を使用する際には相手プレイヤーの体から色を持つチャクラが出てきて、知っている術なら相手プレイヤーの頭上に術名が表示される。

そして、バサラの目の前にいるオツパイ……もとい、ジゼルは白いチャクラのような物を纏っていた。

白は仙術チャクラを示す。

まさかその姿は蛇の仙人モードなのか？

だとしたら、この女……プレイヤーか？

渦巻く疑念にさらに目が鋭くなるバサラ問う。

「お前は……何者だ？」

「ひい!?じ、ジゼル!しゅ、主上ハーデイに仕える巫神だ……です!!」

巫神……

確か千年の長い時を経て神に至る神の使徒にして代弁者。

この世界の宗教においては強い権力を持つと言われていた存在だったか？

バサラは当てが外れた事に喜びと虚しさを混じらせた言葉に表せない感情を振り払い、亜神ジゼルの扱いについて考える。

もし、神の代弁者である彼女を傷つけたりしたら冥界の神ハーディとその信徒たちを敵に回す事になる。

そうなれば、宗教戦争待ったなしで国教にしている国と相手どらなくはならなくなる。

魔法・精霊魔法などの未知の力を持つ魔法使い達。

ロンデル魔法使いの街では、一昔前にミモザという名の女魔法使いが岩の巨人を作り、一人の男と大喧嘩を繰り広げて多大な被害をもたらしたとか……。

ケンカで巨人を用いる奴らだ、戦争になればもっと容赦しないだろう。

ならば……。

考えを整理したバサラは捕縛チームに拘束を解除させるように命令した。

「大蛇丸、すぐに蛇を消せ。我愛羅、ヤマトは拘束をすぐに解け」

「はっ」

バサラの命令により、拘束を解かれるジゼル。

のぞき見していた自分が亜神と知られた事で、体をバラバラにされ、幽閉される所まで想像していたジゼルは腰を抜かし涙目であった。

「捕虜ではなく、客として扱うことを約束する代わりに、正直に国を覗いていた事情を教えてほしい。」

もし…拒否をするなら君の記憶を覗かせてもらう事になるが……」
「言う!!正直に言うから!!脳みそを挟まないでくれえ!!」

客として扱う代わりに正直に話す事を承諾するジゼル。

彼女の想像は翼をはためかせ、記憶を見る!!得体の知れない魔法で挟まれた脳みその中を見られる自分を想像してしまったのだ。

まあ、写輪眼を知らないからジゼルがそんな想像をしても仕方がないのかもしれない。

それに過去には老いた自分の体と若い娘の体を入れ替える女魔法使いも存在していた為、余計にそんな想像をしてしまったのだろう。

ちなみにその女魔法使いは入れ替えた体を堪能していた所にジゼルの先輩に当たる黒髪の巫神に殺されて、この世にはいない。

「?…よくわからんが記憶を見るのに脳みそは抉らないぞ」

「ほ…本当か?」

あまりの恐怖に失禁しかけて居たジゼルはバサラの言葉に安堵の表情を見せる。

ただ、バサラの後ろに居るオカマは脳みそだけでなく全身を調べてみたいとジゼルに興味深々である。

もし、バサラが客として扱わず捕虜として国に連れて行つた際には、この世界の情報と不死身の存在である巫神についてジゼルの体に直接聞いていただろう。

少しだけ緊張が緩んだジゼルはゆっくりと立ち上がり、バサラと共に日の国へと向かった。

。

日の国に訪れたジゼルはこの世界にはありえない文明に驚きつばなしであった。

まずは、案内された商店街地区の街並みに驚き。

その中にある服屋で数多の戦場を渡り歩いた事でボロボロになっていた服を数十分ほど完全修復された事に驚き。

そして、最も驚いたのがバサラの城で出された料理である。

「うっめええええええええええ!!!」

城に響くジゼルの咆哮。

地球でおなじみの和食・洋食・中華やジャンキーなハンバーガーなどを食べたジゼルは口からビームが出るのではないかというほどの驚きと感動を覚え、すっかり料理の虜となったのだ。

出された料理をガツガツと食べて、ご機嫌なジゼルはすっかり日の国と美味しい料理を与えてくれるバサラを気に入り、この城の近くに神殿を建てればお布施として何時でもこの天上の料理が食い放題になるのではないかとさえ考えていた。

ジゼルの想像を超える料理により、本来の目的を忘れてしまった彼女であったが、それはこの世界の食事情を知れば当然の事なのかもしれない。

それほどまでにこの世界の文明レベルが低いのである。

「…それで、ジゼルは何しに来たんだ？」

「?……あ」

爆買いならぬ、爆食いを披露するジゼルに引きつつ、本題を切り出すバサラ。

そして、むしやむしやと咀嚼していた物を飲み込み、バサラの質問でようやく自分の仕事を思い出したジゼル。

ジゼルの与えられた仕事は、この世界に現れた存在の観測と調査。スパイ活動のようなこの仕事について聞かれたら、普通は誤魔化したり、嘘で乗り切ろうと考えるのだろう。

しかし、ジゼルは普通の人間よりも頭が緩かった。

故に……。

「俺の仕事は突然現れたこの国を調査して主上さんに報告することだぜ！」

料理に釣られて、本当のことをペラペラとご機嫌に喋ってしまうのであった。

おバカでも普段は仕事に真面目で、ハーデイの性癖も理解しようと思っている忠実な信徒であるが、バサラを良い奴だと思ってしまうたジゼルの警戒心はゆるゆるで話しても問題ないと思ってしまうたのである。

この調子でジゼルはバサラの質問に全て正直に答えた後も、調査する事なくバサラの城に残り、タダ飯を幸せそうに食べるのであった。

7話

冥府の神、ハーデイ。

ベルナーゴ神殿にて実際に存在する神。

彼女は何百年に一度の娯楽の為にアルヌスで門を作り、異世界とこの世界を繋げるらしい。

ハーデイと交信出来るジゼルの話だと、門と異世界をつなげようと操作をしている時、操作を誤り一瞬だけ違う次元に繋げてしまったそうだ。

そして、繋がったその次元は通常の次元とは違い、こちらに流れこんできたらしい。

故にハーデイは、自身の力を最大限に使用して流れ来る次元をせき止め、入って来た次元を近くの森に上書きしたそうだ。

つまり、門から出てくる日の国という大きな空間エネルギー体が門を通って世界にどんな影響をあたえるのか想像出来なかったから、適当な空間に上書きをした。

それが俺達がこの世界に現れた原因のようだ。

これは、勝手な想像だが通常の空間よりも不安定な電腦空間という場所に穴をあけた事によって電腦空間の中身が流出したのではないだろうか？

もし、ハーデイが通常空間である異世界に上書きしなかったら、流出した空間エネルギーが爆発しこの世界は消えていた可能性も……。

まあ、実際にどうなるかは分からないが悪くて世界の消滅、良くて巨大な爆発と生態系の破壊か？

つか、よく空間の上書きなんて出来るな…神ってチートじゃね？

日の国と自分の命が奇跡的に助かっていた事実を、ご飯を食べながら能天気喋るジゼルに聞かされたバサラはなんとも言えない表情を浮かべていた。

「おいおい、そんな顔するなよ。難しい事は分からないが、助かったんだからいいじゃねえか」

「それもそうだが……お前はいつまでここに居るつもりだ？」

「ん？主上さんから次の命令が下るまでだが？つーか、それよりも信徒にならね？なんなら俺が番になつてもいいぞ」

「……信徒にも番にもならないぞ」

「ちえ、自分でいうのもなんだが、結構良い乳と体なんだぜ？

まあ、いつでも言ってくれよ、好きなだけ揉ませてやるし、抱かせてやるからよ」

片手でハンバーガーを貪り、渋い顔をするバサラに声をかけるジゼル。

彼女はすっかりここが気に入った様で数日間ここに滞在しているのだが、一向に帰る気配を見せない。

それどころか、バサラにハーデイの信徒にならないかと勧誘、ついでに結婚の申し込みをしてくるのだ。

もちろん信徒にはならないし、結婚も………考えていないバサラは興味ないと言わんばかりに断る。

内心ではおバカだが、胸を両手で揺するジゼルが欲しいという欲求に耐えるべく、血の涙を流している。

これがバサラの……独身で童貞の悲しい漢の本音である。

ジゼル自身はこの数日間バサラの事をとても気に入っている。

はじめは失禁するほど怖かったが、スパイ行為をしていた自分に向かい飯と極上の部屋を用意したバサラの器のでかさと彼女をビビらせる強い戦闘能力。

ある意味自作自演による吊り橋効果なのかもしれないが、ジゼルの本能はバサラを逃がしたら、こいつ以上の強いオスに会うのは無理だと告げているのだ。

故に神殿を日の国に作ってバサラといつでも会えるようにしたいし、本能で番になってやると男よりも漢らしくストレートに伝えているのだ。

ただ、本人は生まれてから四百歳となる現在まで恋という物を知らず、自身が恋をしていることに全く気が付いて居らず、ただバサラを気に入っているのだと思っっている。

それほど遠くない未来の別世界線ではカレーで餌付けされてオタ

ク自衛官に好意を抱く彼女らしい恋である。

バサラの仕事場である書齋を出てくジゼルの背中を見送ったバサラは自身の膝を殴って心の安定をはかっていた。

ちなみに翌日も、バサラに挨拶する軽い調子で勧誘と求婚するジゼルを見る度にくノ一達は、訓練所をハチャメチャにしたり、おやつに食べていた団子のくしをへし折ったり、飲んでいた湯呑を粉々に握りつぶしたりと殺気だっていた。

そして、何もしておらずただ道を歩いていた自来也が謎のくノ一集団に半殺しにされたりする事件が発生し、男たちはくノ一達の恐怖に戦慄した。

自来也が理由なき暴力で半殺しにされて治療を受けている頃……。
悪所にある館にて動きがあった。

「つたくーなになが鬼人だ！首切りだ！会合に全く顔を見せねえ腰抜けじゃねえか!!」

「あの若造は完全にわしらを無視しておる」

「目障りだな……俺達で礼儀を教えてやるついでに上納金として縄張りを俺達で山分けにしねえか？」

吸血種の男メデウサ・人種で初老の男コンゾーリ・虎の獣人パラマウンテは会合に招集している再不斬が挨拶に来ない事に苛立ちを募らせていた。

「しかし、なにも考えずに戦えばベツサーラと同じ末路をたどる事になるぞ？」

「へっ、ベツサーラの女とガキを生かしてる甘ちゃんだぜ？ベツサーラのヤツみたいにお断しなけば大丈夫だ」

「いや……奴は残忍な性格と聞いているんじゃないか？」
家族は奴の趣味に使われているんじゃないか？」

本人のいないところで言いたい放題の顔役達。

彼らの中で再不斬は腰抜けの卑怯者、おまけに人妻と幼女スキ一の異常性癖を持つ変態として認識されていた。

「じゃあ、近くにいる黒髪の女を人質にすればいい」

「女ごと切られないか？」

「そんなことをせずとも、数で圧殺すれば簡単だ」

「それだ！」

結局、再不斬にとって人質にする予定の人物が価値があるか分からなかった顔役達は、コンゾーリが提案する数で圧殺する作戦に決定した。

まあ、単純であるが再不斬を知らない彼らにとっては基本で確実性の高い作戦だと思ったのである。

確実に殺せると確信した彼らはワイワイと襲撃時間と再不斬を殺した後の報酬をどう分けるかを話し合っていた。

自分たちの会合が初めから筒抜けであるとも知らないで……。

「白……いつらは俺の獲物だ。手を出したら殺すぞ」

「いいですよ。ただ、ほどほどにして下さいね？組織を丸ごと支配する予定なんですからベツサーラの時みたいに減らされると苦労するんですよ」

「それは、あいつ等次第だ」

白が作った鏡で顔役達の会合を覗いていた再不斬は首切り包丁を片手に殺気をまき散らす程に、怒り狂っていた。

自身をコケにされた事もそうだが異常性癖を持つ変態呼ばわりされたのが何よりも許せないらしい。

「ぞ、再不斬の親分！俺たちはどうしますか？」

ベツサーラから再不斬に鞍替えした失禁男のゴクドー。

彼は、再不斬が支配するようになった縄張りを白と再不斬の命令によってビビって失禁しながらも治安向上に努めた。

始めは再不斬に恐怖していたゴクドーは自分が生まれた吹き溜まりが、少しでも良くなつていく事に達成感や満足感を覚え、今の状態も悪くないと再不斬たちのパシリになっていた。

若干綺麗になったゴクドーは再不斬達によって、このゴミの吹き溜まりがどう変わっていくのかを見届ける為に再不斬達について行くことを決めた。

そんな彼だった。が殺気を振りまく再不斬に怯え、挫けそうになりながらも自分たちに来ることを聞いた。

出会ってからしばらく失禁が絶えなかった彼からは想像できない進歩である。

「……白とここに居ろ」

「りよ、了解っス」

そんな彼を見て、再不斬も何か思うところがあつたらしく、殺気を収めて白と共に残るように命令した。

そして、そんな再不斬を見ながら微笑ましい笑顔を向ける白に対し、ゴクドローは頬を赤く染めていた。

今夜、悪所にて少しマイルドになった鬼が再び包丁を振るう。

8話

鬼が近づいてきているのに気が付かない顔役達が、酒を飲みながら会話を楽しんでいる頃…。

「た、助けてくれ!!アンタに付く!!アンタに付くから!!」

「お、俺もだ!アンタの下に入るから命だけは!!」

顔役達が会合をしている館を護衛している男たちは半殺しにされていた。

腕が折られた者、足をへし折られた者、再不斬に降伏せず首を切り落とされた者。

館の周りは血みどろである。

男たちは顔役達を恨んだ、何が腰抜けの卑怯者だ!!こいつは神の使徒か化け物だ!!

そう、彼らは普段から顔役達の愚痴などを聞いており、再不斬は腰抜けだと教えられてきた。

そのイメージのせいで再不斬を挑発してしまい現状に至る。

ようは、ケンカを売って返り討ちにあったのである。

悪所では強い奴になびく奴は利口者で、逆らう奴は愚か者という言葉がある。

それを見誤れば彼らのように運がよければ半殺し、悪ければなぶられて殺される。

顔役達の金魚のフンをしていた彼らはそれを忘れ、今になってそれを思い出したのだった。

「ふん、雑魚のくせに粹がるからこうなる……。失せろ」

「は、はひい!!」

「消えます!!消えさせていただきます!!」

再不斬の睨みに死体と仲間を置いて逃げ惑う男たち。

再不斬は逃げる男たちから視線を外すと館の中へと入っていった。

「忍法……『霧隠れの術』」

再不斬の術により館の中と外は霧に包まれた。

「さあ、楽しいハンティングの時間だ」

「なんじゃこりゃ？霧か？」

「何で館の中で霧が出るんだ？」

「おい！どうなつていやがる!!？」

気持ちよく酒を飲んでいた顔役達は突然現れた霧に困惑する。

そして、困惑する顔役達のすぐ近くでドサ…ドサ…という物が倒れる音が周囲から連続で鳴り続けた。

しばらくすると顔役達以外の音は完全に消えてしまった。

ここまで来てようやく、酔いがさめた顔役達は襲撃を受けている事に気が付く。

「おい！どんな魔法をつかっているのかはしらねえが、俺たちに逆らつて生きて帰れると思うなよ!!？」

「そうだ！俺たちは悪所の支配者なんぎゃあああああああ!!??」

「どうし…お前…腕が……」

勇ましく、襲撃者に吠えていた顔役達だったが、メデウサの腕がいきなり切断された。

腕を切り落とされたメデウサは切断面の近くを片腕で抑えて悲鳴を上げながら、うずくまる。

その様子に、危機感を覚えた二人は襲撃者と敵対するのではなく交渉することにした。

「わ、分かった！お前の実力は分かったから幾らだ？金ならいくらでもやるから俺を助けてくれ」

「わ、ワシもだ言い値を出そう。だから……」

「お、俺も出す!!…だから…だから俺の腕を……治療してくれ!!」
「ほうっ？」

そこで初めて、顔役達は襲撃者の声を聞いた。

声を聞いた顔役達は、襲撃者の反応に安堵した。

返事を返したという事は、殺すのではなく交渉をする価値があると思っているからだ……。

霧が晴れ、周りを見た顔役達は愕然とした。

周りで侍らせていた女たちが全員倒れていたのだ。

「幾らでも出すと言ったな?」

後ろから聞こえる男の声に驚き、振り返る顔役達。

そこには、黒髪で包帯を口元に巻いた男が大きな武器を片手で持つて立っていた。

「ああ!!出してやるとも!!だから…俺の腕を」

「いいだろう。お前を治療してやるよ」

「じゃあさっさと……」

しやがれ

メデウサは最後までこのセリフをいう事なくその首が再不斬の振るう首切り包丁によって宙を飛んだ。

首はそのまま部屋の壁にぶつかり、重力に従って床に落ちてゴロゴロと転がった。

そして勢いよく血を噴き出し、崩れ落ちる胴体を見ながら啞然とする顔役達。

「もうこれで痛くないだろう?さて、後はお前らだが……」

「や、やる!!土地も金も全部お前にやる!!」

「そ、そうだ!!なんならお前を悪所の王にしてもいい!!だから、殺さないでくれ!!」

こうして、顔役達から全てを受け取った再不斬は悪所の完全なる支配者となり、悪所の住民たちは皆、再不斬をこう呼んだ『鬼人王・再不斬』。

鬼人には逆らうな、逆らえば首を持っていかれるぞ。

悪の限りを尽くしてきた、顔役達は『鬼人の晩餐』と呼ばれる事件を経て、恐怖ですっかり老け込んでしまい。

今では、再不斬の決めた悪所のルールをよそ者と若い連中に教える立派なご意見番になっていた。

再不斬が悪所の支配者になった頃、イタリカでは……。

「イタチ…僕ら忍だよな?潜入しているんだよね?」

「正直、すまないと思っっている」

商人として活動していたイタチとカブト。

彼らは今……。

「家のミユイも気に入っているし、どうか執事になってくれないか？
もちろん、商人を兼任してもらってもいいし、タダとは言わない。
破格の待遇で雇わせてもらうよ」

フォルマル家の当主に執事の勧誘されていた。

9話

イタリカにてフォルマル伯爵から勧誘を受けるイタチとカブト。彼らがどうしてこうなったのかは、再不斬…主に白が悪所の地域活性化を行っていた時の事である。

☆☆☆

イタチとカブトが潜入してしばらく経った頃。

二人は、商品を入荷すると共にアカデミーの卒業生を連れて来て、拠点となるそこそこ大きな店を開店。

二人は日の国にとって品質の低い日用品を手頃な値段で販売する事で、人気の雑貨屋として地域に溶け込んでいた。

まあ、客たちの目当ては雑貨品である事はもちろんだが、一番の目的はイケメン店長のイタチとカブトである。

この二人を見て目の保養をするもの、受けか攻めかを妄想して喜ぶ腐ったマダム達、彼らを見て顔を赤くする男たちと。

そんな腐った客や濃い客も居るが、幅広い年齢層に愛されているこの店はとても繁盛しており大量入荷しても一週間ほどで品薄になってしまうのだ。

「イタチ、僕は本国への報告と新しい商品を受け取りに帰るけど、君はどうする?」

サスケ君に会う為に一緒に帰るかい?」

「いや、俺は部下達とここに残る。気になる情報を得たからな」

「……そうかい。まあ、君ほどの忍が失敗するとは思えないけどね。

事を起こすなら、上手くやってくれよ」

「分かっている」

仕入れと報告の為に日の国へ帰る事になったカブトを見送ったイタチは、大衆酒場で手に入れた情報が書かれた紙に目を通す。

内容は、フォルマル家の娘の誘拐だった。

この情報は偶然、大衆酒場で見た事のない種族の男を見つけた部下が追跡して得た情報だ。

イタチは、部下の詳細なデータから間違いなく誘拐は起こると判断

した。

故にイタチは日の国には戻らず、商人のイタチとしてフォルマル家とのパイプを繋ぐ為、フォルマル家の娘を誘拐する計画を利用することにしたのだ。

「イタチ様。我々はどのように？」

「俺一人で十分だが……念のために三人ほどついて来い」

「はっ」

バサラとサムイによって貸し与えられた部下から優秀な三人を厳選した後、イタチは誘拐犯との戦闘に備えるのであった。

。

誘拐が決行される深夜。

イタチが戦いに備え終わった頃……黒ずくめの男たち3人が、フォルマル家伯爵領へと侵入した。

「まったく、危険の高い仕事を受けたもんだぜ」

「仕方がないだろ。全ては俺たちの仕事を邪魔する鬼人が悪い」

「あの野郎のせいで、俺達が売ってる薬の収入が減ったからな。」

「ここで一発、ドカンと稼がねえと……」

彼らは悪所に住む闇の組織の構成員で、麻薬や毒を貴族や住民達に販売して組織の活動資金を稼いでいた。

しかし、彼らの担当していた地域のボスが突如、変わってしまったのだ。

ただ、変わったただけならよかったのだが、鬼人と呼ばれた男のルールによって麻薬や毒物の販売は禁止されたのだ。

始めは無視して、通常通り薬を売り歩いていた彼らだったが、仲間が次々と死体で発見され、商売が出来なくなったのだ。

故に、資金を調達出来なくなった彼らは、組織の命令でフォルマル家の娘の誘拐を行うことになったのだ。

「なったのだが……」

「なんかおかしくねえか？」

フォルマル家の屋敷に侵入した彼らの一人が違和感に気が付いた。
「まあ……すんなり行き過ぎてる気もするが」

「…貴族の屋敷なんてこんなもんだろ？俺は何回か潜入して盗みをやった事があるが、こんな感じだったぞ」

違和感を感じながらも、二人の調子に合わせる事にした男。

彼の感は正しかった。

現在この屋敷の人間は、ターゲットとなる娘は部屋で眠らされ、それ以外の住人はイタチによる幻術を掛けられており、侵入者である彼らを認識できないでいるのだ。

もし、違和感を感じた男の言葉に耳を傾け、撤退していたのなら彼らの運命は変わっていただろう。

「おい、運がいいことに娘は眠っているぜ」

「おお、ようやく俺達に運が向いてきたな」

眠っている幼女を縄で拘束し、猿轡を噛ませる二人の男たち。

もう一人は周囲を警戒しながら逃走ルートの確認を行っていた。

「!!？」

そして、猿轡をされた事で息苦しくなったフォルマル家の娘が目覚まし、拘束を抜けようと、もがき出す。

「はっ、抜け出そうとしても、無駄だぜお嬢ちゃん」

「恨むんなら、仕事をサボっている家臣たちを恨むんだな」

男たちのゲスイ笑顔に恐怖で涙を流す娘を肩に担いだ男達は娘の部屋に手紙を残し逃走を開始した。

彼らは予定していたルートを走り抜け、無事にフォルマル伯爵の家を抜け出し、安堵の表情を浮かべる。

「やったぜ、これで大金は俺達のもんだ」

「思った以上に楽な仕事だったな。もう薬じゃなくて誘拐で稼げるんじゃないねえか？」

「バカ、油断していると足元をすくわれるぞ」

男たちは静かに伯爵領を抜け出ようとしていたその時。

男たちの前に一人の男が現れた。

「この世界の忍…いや、盗賊がどれほどの物か計らせてもらったが

……時間の無駄だったな」

黒い髪と紅の瞳を持つ男……うちはイタチである。

「あれは……確か雑貨屋の若造か？」

「なるほど……全てはお前さんの罠だったのか。通りですんなりと成功したわけだ。」

「で？俺達の首をフォルマル家に届けて恩賞でも貰う腹だったのかい？」

それとも……俺達から分け前を貰うつもりだったか？」

「ククク、残念だったな。分け前はやらねえし、お前みたいな若造に俺達三人を相手に出来るわけねえだろ」

イタチの行いに賞賛しつつも、詰めが甘いと笑う男たち。

闇を知らないモヤシ小僧が、俺達選ばれし者に敵うわけがない。

イタチの体格から、自分たちよりも弱いと判断した男たちは、娘を置いてイタチに襲い掛かり激しい戦闘を繰り広げる。

「ヒヤハハ……さっきの余裕はどうした小僧!!」

「顔がいいからって調子に乗った罰だぜ!!」

「運が悪かったな……小僧!!俺達ハリヨを敵にした事を後悔して逝け!!」

男たちの激しい攻めに傷つき、苦悶の表情を見せるイタチに愉悦の表情を見せる男たち。

「ハリヨ?だと……!?!」

片膝をついて驚愕の表情を見せるイタチを見た男は自分の優位性に心地よくなり、イタチの質問に笑顔で答える。

「そうだな……仕事を手伝ってくれた褒美に教えてやるぜ。俺達は選ばれた存在で構成された組織『ハリヨ』だ」

「そのハリヨはどうしてフォルマル家の娘を誘拐する？」

「組織の為の資金集めよ……元々稼いでいた場所に鬼人とか言う男が現れて商売が出来なくなっちゃった。」

だから、組織の命令で俺達は誘拐をする事にしたのさ……」

「なるほど……ハリヨと言う組織には興味がある」

「ん?なんだお前、俺達の組織に入りたいのか?だったら詳しく教え

「やるぜ」

組織について洗いざらい喋る男。

しかし、彼は気づいていなかった。

今、自身の近くに仲間が喋らない事……そして自分が組織の重要な情報や、次に組織で行われる大きな計画の存在をペラペラしゃべっている事に……。

「これも簡単に引つかかるとは……準備が無駄に終わったな」

イタチに抱きかかえられたフォルマル家の娘に聞こえない、イタチの小さな呟きと共に地面に崩れ落ちる男たち。

そう、男たちはイタチに出会った瞬間にそれぞれが写輪眼によって、情報を引き出されていたのだ。

その時間は数秒。

待機していた忍達が見た光景では、イタチと遭遇した男たちが一瞬だけその場で動かなくなり、娘を奪われて倒された。

まさにその姿は、忍として完璧な仕事ぶりであった。

「もう、大丈夫だ。君は助かった」

猿轡と縄を解き、泣きじゃくる幼いフォルマル家の娘を抱きしめるイタチ。

こうして、フォルマル伯爵家の誘拐事件は幕を閉じた。

ただ、イタチはこの対応は間違いだったと後悔することになる。彼は幼い少女の感情を読みきれていなかったのだ。

伯爵家への貸し、もしくは縛られない程度の繋がりを期待していたイタチだったのだが……誤算が生じてしまった。

商会で見た事のない商品を取り寄せる将来有望な商人として噂をされていたイタチとカプト。

噂を聞き、商品見た伯爵はイタチとカプトはイタリカを潤す事になるだろう将来有望な若者であると期待して免税特権を与えようとし

ていたのだ。

だが、疑惑もないと言ったら嘘になる。

見た事のない商品の仕入れ先に、高い戦闘能力。

正直かなり怪しい。

だから、自分の手元に縛り付けイタチを探ろうとしているのだ。

敵国の人間だったのなら集団で殺すか、毒殺をすればいい。

そうでなかったら、商品の出どころをフォルマル家が独占して抑える事が出来る。

フォルマル家に損はない。

故に当主は暇さえ見つければ、イタチを直接勧誘するのだった。

「イタチ……君がロリコンだと知ったら、サスケ君に殺されるよ？」

「俺はロリコンじゃない」

10話

ハリヨ。

異なる種族が交配して生まれたハーフの集団。

彼らは自分たちこそ、どの種族よりも優秀で選ばれた存在であると言ふ思想を掲げて活動する闇の組織である。

彼らの最終目的は帝国の皇族に自分たちの血を混ぜて、帝国を支配する事。

その為の計画は現在調査中。

「ハリヨ……か」

手元の資料を自室の机に置いて、考えるバサラ。

彼は今、頭を悩ませていた。

いつのまにか、占拠した悪所や市場を支配しつつあるイタリカ。

調査を命じた覚えはあったバサラだが、侵略を開始しろとは一言も言っていない。

バサラのお腹は部下達の忠誠心でお腹いっぱいであった。

ただ、そんな彼のストレスを軽減する出来事も僅かにあったのだ。

それは……ジゼルがベルナーゴへと帰還したのだ。

彼女が仕える主神ハーデイの命令により、バサラ達の監視が終了。

詳細はよくわからなかったがドラゴンの育成をするらしい。

別れの祭、彼女の背を見送ったバサラはドラゴンの育成って大丈夫なのだろうか？

まあ、彼女は不死身で龍人だ。

何も問題はないだろう。

それよりも、あのオツパイが見れなくなるのは残念だ。

と、心配半分セクハラ半分の思考をしていた。

そして、バサラにとって重要な旅が決定した事である。

なんと、再不斬と白の支配で最も安全となった悪所を訪れる許可を得たのである。

はじめはエルフの集落を希望していたのだが、悪所の安全と他種族が見る事が出来るという事で変更したのだ。

ただ、行先が決まったこの旅には正直、困った事がある。
護衛の忍である。

この世界の人間の戦闘能力がそれなりに割り出せたので護衛の忍は一人で問題ないと判断されたところまではよかった。

しかし、バサラの護衛を務めるのは誰か？という事でくノ一達の己の欲望を叶える為の激しいバトルが修繕された演習場にて勃発。

大地が抉れ、森は焼野原……。

そして、演習所の修繕に駆り出される事に涙をながす、ヤマトと土遁使いの忍達。

周辺を破壊しつくし、死屍累々の中で純粋に『旅も青春だ!!』と言って参加した一人の珍獣がちゃっかりと残っていたのだ。

そう、その珍獣の名前は……。

「バサラ様!!旅の準備が出来ましたぞおおお!!」

バサラの書斎に大きな声と共にやって来た、暑苦しいオカツパ頭の男。

自称、日の国の青き猛獣『マイト・ガイ』であった。

負けたくノ一達はガイを羨ましいと思いつながらも、他のくノ一に任せて出し抜かれるよりはマシと判断し、決定したのであった。

☆☆☆

「いやあ、旅もまた青春ですなあ。

自然を感じ、人々との出会いと別れ…楽しみですなあ」

「そうだな」

大きなリュックを背負い、楽しそうにバサラと話すガイ。

二人は国を出て目的地である帝都悪所へと歩き出した。

「しかし、バサラ様自身がわざわざ悪所を視察する為とはいえ、旅をするとは珍しいですな。

飛雷針の術でマーキングしたクナイを再不斬か白に送れば一瞬で飛べるではありませんか」

「たまにはな……自分の足で歩いてみたくなるものだ」

ガイの指摘に一瞬足を止めて、答えるバサラ。

冷静にそれっぽく答えたが、『その手があったかー!!』と、内心

は凶星を付かれて後悔していた。

そんなバサラに対し『さすがですな!』と感心するガイ。

もし、ガイが彼の凶星を付いた時、彼の顔を見ていれば気づいたかもしれないが、残念な事にガイは彼の後ろに居た為に気づけなかった。

日の国を出た、ガイとバサラは歩き続けた。

食事時には保存食以外の食料を調達する為に、ハンティングを楽しんだり、夜にはバサラが木遁で作った小屋で眠る。

問題なく進む二人の旅路であったが、五日目の夜。

二人が居る小屋を監視する者達が居た。

.....。

岩陰に隠れて監視する8人の男たち。

彼らは白と再不斬が支配する悪所で身の危険を感じて逃げ出した、強姦魔や度重なる盗みを働いた男達だ。

今の悪所は少しずつ治安が向上し、犯罪件数が半分にまで落ちていき、飢えていた弱い人々は再不斬と白に守られ、生きていく強さを身に付ける為に修行をする。

そして、強くなった彼らは悪所の警備部隊『鬼子』となつて、ゴクドーと共に鬼人王の名において犯罪者を取り締まる。

殺しには処刑を、盗みには二度と盗めぬように指を切り、強姦には下半身のジョニーを切る。

もし、現在の悪所に彼らが残っていたら、全員がジョニーと永遠のお別れをしていただろう。

「ちきしょう!!何で俺達がこんな目に合わなくちゃならないんだ!!」

「悪所は、力こそが全だ。襲われて犯される弱い奴が悪いの!!」

集団の力で好き勝手やって来た男達の身勝手は悪所を出ただけで、治るはずもなく悪態を付く彼らは必然的に盗賊へと身を落としていた。

「しかし、あの小屋はどうしたんだ?ここには小屋なんて建っていないかったはずだぞ」

「そんなことは、どうでもいいだろ。それよりも報酬が問題だ。初めての獲物が男二人だ。女が居れば楽しめたんだが……」
「それはまた今度でもいいだろう。今俺達に必要なのは食料と寝床だ。」

あの小屋と食料を奪えばしばらくは、生きていける」

「俺は男でも行けるぞ？・緑色の服を着た太い眉毛の男が好みだな」

「「「「「……………」」」」」」

男二人の獲物に、喜びの表情を見せる男。

彼は男も女もいける両刀使いだった。

仲間の知りたくもなかった性癖を知った七人の男たちは一斉に尻を抑え、眉毛の男に同情した。

☆☆☆

「アイツら……………どうしますか？」

「悪所から逃げ出したと言っていたし、言動もクズそのもの。」

「盗賊なんぞ、百害あつて一利なし。殺しても問題あるまい」

男達の気配に気が付いた二人は、小屋の中にバサラの影分身を置いて脱出し、遠くから襲撃しようとする小屋を囲おうとする男達をガイとバサラは尻を抑えながら見ていた。

しかし、これはいい機会なのではなからうか？

今は大丈夫かもしれないが、いつかは自身の手で人間を殺す日がやってくる。

もうここは平和な日本ではない。

戦わなければ殺される異世界なのだ。

オツパイが大好きで、ポンコツなバサラだがこの瞬間だけはかなり真剣な表情を浮かべていた。

これはいい機会だと、バサラは日本に居た自分との決別の意味を込めて印を結んで術を発動させた。

火遁・豪火滅却!!

僅かなチャクラ消費を感じたバサラの口から放たれた紅蓮の豪火は夜を照らす炎の津波となって、小屋ごと男達を飲み込み滅却した。

しばらく燃え続けた炎が消え、目の前は地面が燻る焼野原。

その光景を見たバサラはゲーム時代と変わらぬ威力に感心しながら口を開いた。

「やり過ぎだな。次はもう少し弱い術を使うとしよう」

新たに小屋を作り、寝床を確保するバサラにガイは……。

俺：必要だったかな？

今の術でゲーム時代での異常な強さと火力を誇ったバサラの強さを思い出し、自身の必要性に前向きな彼が数秒間だけ悩んでいた。

ただ、すぐに悩みを忘れて飯を食って寝た彼の精神は実に羨ましく思う。

目的地まで残りわずか……。

11話

「ここが……悪所」

「ようやくたどり着きましたな」

旅の終着点である悪所に辿り着いたバサラとガイ。彼らは小汚い路地を真つすぐ歩く。

すると一人の男が姿を現した。

「アンちゃん達…旅の人かい？」

男は獣の耳を持つ獣人だった。

「そうだが……アンタ、我らに何か用かな？」

「一度しか言わないからよく聞きな。」

ここ悪所においては、鬼人王の定めた法は絶対だ。

逆らう人間は首を切られるから、大人しくしている事をお勧めする

……ブツ?!?」

「ゴクドー…貴方はバカですか？殺しますよ」

ガイの質問にキメポーズで答える男だったが、突然現れた白に股を蹴られて悶絶する。

その光景に股間がヒュンするガイとバサラだった。

………。

「本当に…すみませんでした」

「いや…もういいから。それよりも下の方は大丈夫かね」

「ええ、大丈夫っす。一応…慣れてるんで」

白に重要人物である俺に無礼を働いた事で説教されたゴクドーを心配するガイ。

そんな心優しいガイに股間を抑えながら大丈夫だと苦笑いでこたえるゴクドーに同情するバサラとガイだった。

しばらくの間、白と股を抑えるゴクドーに案内され、四人がやって来たのは古い館だった。

中に入り、一際大きな部屋へと入るバサラ達を待っていたのは部屋の主である鬼人再不斬。

彼はソファーにどっかりと座った状態で、入って来たバサラ達を二

ヤリと凶悪な笑みを浮かべて歓迎した。

「よお、大将。まさかアンタ直々に来るとは思わなかったが……まあいい。」

それよりもアンタに報告しなければならぬ事がある」

「ハリヨの事か？」

「ククク……話が早くて助かるぜ。」

アイツら、この国のボンクラ皇子を誑かして戦争をおっぱじめるつもりだ」

「なんだと？」

戦いが始まる事が嬉しいのか、上機嫌でバサラに報告する再不斬。

まさか、日の国の存在がばれたのか？

「安心しな。日の国の存在がばれたわけじゃねえ。」

戦争という名の奴隷狩り、目的はヴォーリアバニーの女だ。

まあ、アンタには耳障りな話だろうな」

怪訝な表情を浮かべるバサラに、何でもないように語り掛ける再不斬。

ヴォーリアバニー。

平原を住処としているウサギの獣人。

かの種族を知った時、思わず脳内でヒナタの頭に素敵耳を妄想した経験のあるバサラには反応せざる得ない種族だった。

「……おいおい、ここでキレないでくれよ。」

アンタにキレられたらせつかく支配した悪所が灰になる」

素敵耳がエロ同人誌みたいに蹂躪される場面を妄想したバサラは怒りに燃え、視線を向けられている再不斬は冷や汗を流しながらバサラを宥める。

「それで……そのクソ皇子はどこにいる？」

「二日ほど前に帝国を出て行ったが……アンタまさか……」

「ああ、ヴォーリアバニーを助けに行く」

「おお!!見知らぬ種族の為に立ち上がって戦うとは……まさに青春!!」

私はいつでも行けますぞお!!」

素敵耳を守る為に戦いに赴く決意を固めたバサラ。

そんなバサラに感動し、涙を流しながら追従するガイ。
再不斬は頭を抱えた。

「……せめて、ここには被害が及ばないように頼む」

もう、この二人を止めることは出来ないかと悟った再不斬は被害が最小限になるように切実に願った。

「弱い者の為に戦う……。実にバサラ様らしいじゃないですか」

「まあな。奴のああいう所は嫌いじゃない」

一気に疲れた表情を浮かべた再不斬に話しかける白。

二人は、やる気に燃えるバサラを見ながら頼もしくも少し暖かい気持ちになった。

彼らの考えとは違うが、バサラはガイを連れて素敵耳を守る為に悪所を飛び出した。

「では、再不斬さん。」

僕たちは余計な仕事を増やしてくれたゴミを掃除しますか?」

「ああ、間接的にはいえ、俺達の大將を動かした落とし前は付けさせなきゃならんよな」

二人は、笑みを浮かべバサラが動く原因を作ったハリヨを潰しに向かった。

ちなみに、一緒に部屋に入ったゴクドーは話の大きさについて行くことが出来ず、ぽけつとしていた所にバサラの威圧を受けて失禁と同時に気絶していた。

☆☆☆

帝都を出た4日目。

ゾルザルはヴォーリアバニーの王国を襲っていた。

「ふははは!!どうしたどうした!?!戦闘民族が聞いて呆れる!!」

俺をもっと楽しませてみる!!」

下町で出会ったボウロという男に誑かされた彼は、兵士達に蹂躪されるヴォーリアバニーを見て笑っていた。

自分こそが最強!自分こそが英雄にして次代の王!

彼はこの戦争とはとても言えない虐殺に、自分は頭のいい弟よりも箔が付いたと優越感を感じていた。

「殿下！ついに敵の女王を名乗る牝が下りました!!!」

「おお！ついにこの俺に屈服したか！」

ヴォーリアバニーの族長が屈服した。

その伝令の言葉に、気分を高揚させるゾルザル。

彼は今、支配欲と征服欲が満たされていくのを感じていた。

皇族専用の天幕に行くとき白い耳の全裸の美女がいた。

こいつが自分で得た初めての戦利品。

女を見て、ゴクリと喉をならしたゾルザルは専用の椅子に座り女を見下ろした。

「…私はあなたに全てを捧げます。

ですからどうか…どうか一族をお助け下さい」

女は土下座をし、ゾルザルの慈悲を求めた。

そんな彼女を見たゾルザルは新たな欲望が芽生える。

こいつを徹底的に凌辱し、苛め抜いてやりたいと……。

サディステックな笑みを浮かべたゾルザルは女を犯そうと女の前に出る。

「くう!？」

「それはお前の献身しただい」

女の耳を掴み顔を上げさせ、女をいたぶろうとしたその時。

激しい地鳴りと轟音が鳴り響いた。

ゾルザルは女を放り出し、何事かと天幕を出て唾然とした。

「な、なんだあれは……」

ゾルザルの視界に映るのはジャイアントオーガをも超える紫の巨人。

しかも巨人は一体ではない。

十を超える巨人の軍団がゾルザルの兵をアリののように踏みつぶし、情け容赦なく蹂躪していく。

その光景はまさに地獄絵図であった。

「や、奴らは一体なんなのだ!？」

「分かりません!!突然現れて、我らを襲って来たのです!!」

ゾルザルは近くで自分と同じように、地獄を見ている兵を捕まえ何

があつたのかを問いたただすも、前線に居たわけでもない兵士にもゾルザル同様に理解できないでいた。

腰の剣が振るわれれば大地と共に兵が裂け、弓を放ても堅牢な守りで通らず。

まさに無敵の化け物であつた。

「そ、そうだ!!あの女なら何かを知っているに違いない!!天幕に居る女を連れてこい!!」

ヴォーリアバニーを追いつめて現れたのだ。

決して無関係ではないと考えたゾルザルは兵士に女を連れてくるように命令するが……。

「居りません!!女が居なくなっています!!」

「なんだと!?!近衛は何をしていた!?!」

「眠らせてもらつた……永遠にな」

混乱するゾルザルの背後から聞こえた男の声に振り向くと、紅の瞳がゾルザルを見つめていた。

……。

ここは何処だ?

俺は一体……。

紅の瞳を見たゾルザルは暗い世界にいた。

体が…動かない?

四肢を動かそうとするも何かに固定されたように動かない。

動けない四肢と暗い世界に恐怖を覚え始めた、ゾルザルの前に一人の男が現れた。

「今から72時間…貴様に金的をする」

「……は?」

それからゾルザルは見知らぬ男の宣言通りに暗い世界にて、ゾルザルは汚い悲鳴を上げながら金的を受け続けた。

12話

バサラの木遁で生まれた分身たちの半数は、須佐能を顕現させて帝国軍を蹂躪し、残りの半数は敵を体術や幻術で戦闘不能にしながらいら、捕まった女たちの救助をしている。

そんな中、バサラの生み出した幻影の世界では……。

「ふおあああああああ!!?!」

汚い皇子の悲鳴がこだまじていた。

股間をつま先で潰されては再生、潰されては再生を何度も繰り返した。

この鬼のような所業は休むことなく続いて居たが、ついにこの幻影は最後の蹴りとゾルザルの乳首が切られた事でようやく終わりを迎えるのだ。

「……」

現実へと帰って来たゾルザル。

彼は股間と乳首を襲った激しい痛みで失禁し、気を失った。

「ゾ、ゾルザル様あああ!? ナゼエエエ!」

ちなみに近くに居た兵士たちもゾルザルより数秒遅れて現実にカムバツクした。

彼らが見たのは幻影。

百人を超えるスタイリッシュなポーズを決める全裸のゾルザルに全身を隙が無いレベルで執拗に舐めまわされたのだ。

彼らもまた、あまりの恐怖に意識を飛ばしてしまった。

こうして、物理とおぞましい幻影にゾルザルの兵は壊滅したのであった。

……………

数日後、帝国の元老院にてゾルザルが病気になったと発表された。もちろん、ゾルザルは病気などなっていない。

ゾルザルはヴォーリアバニーとの戦争にて行方不明となったのだ。現在は捜索隊が編成されており、彼の妹が指揮を執っている。

☆☆☆

「それで……この男はどうしますか？」

一応、ヴォーリアバニーの女たちは処刑を求めているようですが……」

「まあ、処刑したい気持ちも分かるのだが……」

バサラは簀巻きにされたゾルザルの処遇に困っていた。

何故ならバサラはゾルザルの記憶を見てしまったのだ。

本当の兄弟のように育った義兄が自分の父親に責め殺されたその日から、ゾルザルは王族や貴族に恐怖を覚えたのだ。

自身もいつか義兄のように殺されるのではないか？

自分の弟が殺しに来るのではないか？

それ以降、彼は無能を演じた。

しかし、使えぬと判断されれば殺されるとも彼は幼い頭で考えて己を鍛えた。

戦争では使える無能……つまり物語に出てくる脳みそ筋肉な英雄を目指したのだ。

今回の奴隷狩りも彼なりに判断した英雄らしい行動だったのだ。

それを知ったバサラは幻影の世界での拷問を串刺しから、金的に変えたのだ。

まあ、途中でバリエーションを増やして乳首切りも入ったが……。

「ガイ、この男はお前に預ける。根性を叩きなおしてやれ」

「おお!!このような下種男にも慈悲を掛けるとは……このマイト・ガイ!感動いたしました!!」

早速日の国へと連れ帰り、根性を叩きなおします!!」

うおおおお!!

敬礼した後、ゾルザルを抱えたガイは獣の様な雄叫びを上げて、日の国へと向かって走り出した。

わざわざ八門遁甲のリミッターを外して……。

ゾルザル……お前には厳しい修行の日々が待っているだろうが、頑

張ってくれ。

バサラは、土煙を上げながら速度を上げるガイの背中を見ながらゾルザルに黙とうを捧げた。

「さて、我々も行くこうか」

『はい』

ゾルザルの魔の手から命を救われたヴォーリアバニー。

だが、彼女たちの国はゾルザルによって復興が難しい状況にあった。

そこで、バサラが提案したのは彼女たちの移住だ。

日の国の農業地域に彼女たちを移住させることにしたのだ。

彼女たちは故郷を去る寂しさを感じながらも、命の恩人であるバサラの提案を承諾。

日の国に獣人の国民が誕生したのであった。

そして、ゾルザルの子孫がお亡くなりになった日から一週間。

バサラはヴォーリアバニーたちを引き連れて日の国へと帰還した。

帰還するとそこにはピチピチの緑色のタイツに根性の額あてをした金色のオカツパ頭の男が門で待ち構えて居た。

男の姿に引いているヴォーリアバニー。

バサラは男の髪の色を見て、誰なのかを判断して冷や汗を流した。

バサラ達が自身に気づいたと思った男はバサラ達の元へ、全速力で駆け出し……。

「すみませんでしたー！！！！自分が間違っておりますー！！！！」

土煙が巻き起こるスライディング土下座を行った。

「自分が間違っております！！！！自身の弱さに負け、優秀な弟と妹に恐怖してあのような蛮行を……。」

本当にすみませんでした！！！！……ハアハア」

地面に頭を何度も打ち付けて謝罪しながらハアハアする男に対して、誰なのか分かっていないヴォーリアバニー達は生理的に受け付け

ないようで震える体を寄せ合っていた。

「まだだ、ゾルザル!!そんな謝罪では彼女たちの恐怖は拭えないぞ!!」

「オツス!!」

『ええええええええ!?』

突如、男の近くに現れたガイの言葉によつて、ようやく自分たちにひたすら謝る変人がゾルザルと知つて驚愕するヴォーリアバニー達。

あの帝国の次代皇帝となる傍若無人の化身にして、自分たちを滅亡の一步手前まで追い込んだ男の成れの果て。

驚くなどというのが無理だろう。

特に、彼と面と向かつて話した事のある女王のテューレは顎が外れそうになっていた。

「申し訳ありませんでしたああああ!!」

土下座から逆立ちを披露したゾルザルは、頭部を地面にごつ、ごつ、とリズムカルに打ち付けながら斬新な謝罪を披露。

若干顔が赤くなっているのは、頭に血が上っているせいだと思いたい。

ゾルザルの奇行に激しい險悪感を隠しきれないヴォーリアバニー達の視線を受けさらに表情がおかしくなるゾルザル。

謝罪をしているつもりかもしれないが、全くの逆効果であった。

結局、謎の奇行に耐えきれなくなったヴォーリアバニー達は『早くどこかに行け』という気持ちを込めて、ゾルザルの謝罪を受け入れた。

もはや謝罪という名の脅迫である。

「先生!!自分はやりました!!自分ルールって最高ですね!!」

「演習場百周やりきった成果だ!!おめでどうゾルザル!!」

そして、許された事を喜び、強く抱擁しあつたガイとゾルザルはバサラに親指を立ててこう言った。

「応援ありがとうございました!!」

彼らの青春脳が黙って傍観していたバサラの姿は応援しているように見えたらしい。

しかし、バサラは見ていた。

抱き合っている時、ゾルザルがガイの背中を撫でまわしていた所を

……。

「どうやら、あの幻影の世界を経験した事でゾルザルの性癖がかなり危険なものへと変貌したらしい。」

「さあーゾルザルよ!!次は演習場二百周だ!!」

「はい!!二百周やりきったら、国に帰って弟と妹と正々堂々勝負します!!」

出来なかったら腹筋二百回です!!」

「よく言った!!さあ、俺たちの青春はまだ、始まったばかりだ!!」

「はい!!先生えええええ!!」

バサラ達を完全に置いてきぼりにして二人の世界に入ってしまった二人は、新たな修行を行う為に演習場へと走っていった。

やべえ……選択を間違えた。

はじめは立派な先生をしていたガイならゾルザルを更生させてくれると信じて預けたバサラであったが、取り返しのつかない状態のゾルザルを見て、激しい罪悪感に襲われた。

本編第一部終了記念・ZORUZARU熱血伝!!

ZORUZARU熱血伝!!

猛獣に拉致されて、日の国の病室で眠るゾルザル。

そんな彼の様子を見ようと二人の男が病室に向かっていた。

「ガイ…本当に大丈夫か？」

「な、なんのこれしき…少し尸魂界を往復した程度、全く問題ない。

牢屋で同居した色黒の青年に正しい正拳突きを教えられるほど余裕だったぞ。

その後、脱獄して悪い眼鏡の死神も倒してきたんだ」

カカシとガイだった。

ただ、カカシの隣を歩くガイは暁の女性メンバーから拷問のような暴行を受けた後で精神がボロボロだ。

彼は致命傷を負う前に、護衛対象であるバサラを置いてきたのは本人の命令であったと伝えた事で半殺しで済んだのだが…綱手の拳で防御した腕と共にアバラがへし折れ、威力を殺しきれずに壁を粉碎するほどの勢いで激突。

そのせいで彼の意識は一時的に夢か異世界に飛んでいたらしい。

ちなみに、ケガはその場で治療されたくらしくケガひとつない…はずだ。

「お前…何処の世界に行ってきたの？尸魂界ってなに？つーか死神倒したの？」

「ああ、かなりの強敵だった。」

「…一度ここで、頭を見てもらったら？」

ガイの妄想に本気で頭の中が心配になったカカシは頭の検査を勧めた。

カカシの心配をよそに元気よく入ったガイはその場で停止した。

まるで石像のように固まるガイの様子に不安を覚えたカカシは彼に続いてゆつくりと病室に入った。

カカシが病室に入ると清潔である病室の壁と床は血みどろになっており、ベットには金髪の青年が股間を抑えて震えていた。

「だ、だだ、大丈夫だ。」

…も、もう一度、尸魂界に行つて今度こそ卍解を習得すれば、俺の斬魄刀も卍解するはずなんだ。

決して俺の斬魄刀が使えなくなったわけじゃない」

「……………」

ガイが連れてきた捕虜を初めて見たカカシは思った。

斬魄刀ってなんだ？彼は自分のアレに名前を付けているのか？

尸魂界は実在するのか？

震える彼に混乱するカカシ。

そんなカカシを見て、掃除道具を持ったシズネがカカシに説明する為に話しかけてきた。

「カカシさん。彼は…下半身の大事な機能が完全に停止してしまいまして……。」

現実を受け入れられず、サクラに『貧乳でも構わん!!俺に抱かれろ!!』と言った瞬間。

鬼の様な形相をしたサクラにマウントを取られて顔面をひたすら殴打、あわてて止めに入った私が急いで治療して完全回復させたのですが…目覚めたら今のような状態になってしまつて…。

恐らく、精神と肉体に多大なショックを受けた事で幻覚とパニックを同時に起こしているのだと思います」

「……………」

その幻覚は皆、同じものを見るのかと質問したかったカカシだが、現状はそれどころではない。

これでは、捕虜となつた彼から帝国の内部情報を聞くことが出来ない。い。

「サスケの出番だな…これは」

☆☆☆

「国の警戒レベルがようやく下がつて、落ち着けたと思つたんだが……。」

なんだこのウ斯拉バカは？」

「いやあ……彼は一応、仮想敵国の皇子なんだけどもね？」

下半身が使い物にならなくなったショックとサクラに半殺しにされたショックで精神が大変な事になっていな。

「お前の万華鏡写輪眼で治療できないかな……なんて」

カカシに呼ばれ病室の惨状を目撃したサスケは苦虫を？み締めたような表情になり、サスケを呼び出したカカシが状況を簡単に説明した。

「……凄く嫌だが、写輪眼の瞳術で強引に精神を安定させるのは可能だ。

しかし、その後はどうするつもりだ？

仮想敵国の人間なら抵抗するだろう。

まさか俺にこのウスラバカの記憶を読めと？仕事がようやく片付いた俺に仕事をしろと言うのか？」

「頼む……今度、トコロテンをおごるから」

仕事に疲れた。早く帰りたい。そういう思いがひしひしと伝わる表情でサスケは精神の治療を開始するサスケ。

彼はSSRクラスの忍びで、暁以外でバサラに戦闘ダメージを与える事の出来る数少ない実力者。

そんな彼は、各部署を務める部隊に配属され激務に追われていたのだ。

そのせいでサスケのクールなキャラが壊れていてもそれは仕方がないことだ。

そして、なんだかんだで仕事を引き受ける彼の背中にはまるでブラツク企業に勤めるサラリーマンのように哀愁が漂っていた。

「さて、サスケのお陰で情報も手に入ったし俺は帰るけど……大丈夫か？」

「ハハハッハハ！安心しろカカシ!!俺にかかればどんなクズ野郎でも立派な男にして見せる!!」

ナイスガイなポーズで大丈夫だとアピールするガイを見て、より一層不安が強くなるカカシ。

しかし、主であるバサラの命令なのだ。

臣下である自分が介入することは出来ない。

後は、これから起こるであろう被害が、最小限に留まる事を祈るばかりだ。

無駄な祈りを捧げ、帰宅するカカシの背中を見送ったガイはとりあえず……。

「このバカヤロー……!!!」

「ぶべらあ!」

ゾルザルの顔面を殴った。

ガイの拳にトリプルアクセルのように綺麗に舞ったゾルザルは突然の出来事に頭が真っ白になる。

「今から貴様の根性を叩きなおしてやる!!修行だ!!」

「は?何を……」

「口答えするな、バカヤロー!!!」

「ポピーーーー!!」

この後、ゾルザルは修行を開始するまで殴られ続け、ようやくゾルザルの修行が始まった。

ここからは少しダイジェストにお送りしよう。

「返事はハイか押忍だバカヤロー!!!」

「ぶふお!」

まずは返事を物理で叩きこまれ……。

「まずは演習場を軽く五十周だ!!」

「この広さを!?無理だ!!貴様は皇子である俺を殺す気か!」

「皇子なんて関係あるかコノヤロー!!!後、先生と呼べ!!」

「ごへえ!」

自分の立場を拳で叩きこまれ……。

「センセイ……キツイ」

「キツイ今を乗り越える事……それが真の修行で青春だ!!」

ほら、青春万歳!!」

「セイシュン……バンザイ」

時には怪しい洗脳を施され。

修行が5日経過した頃、すっかり大人しくなったゾルザルはガイと

打ち解けて来た頃、彼は昔の事を思い出していた。

それはまだ、先代皇帝の忘れ形見…彼の義兄が生きていた時の事だった。

『カティ義兄はどんな皇帝になるんだ？』

『ん？俺か？俺はな…ゾルザル。』

帝国を戦争のない国にして、亜人たちを人種と平等にすることかな？』

彼の義兄は戦争を嫌う優しい男だった。

貧民だろうと亜人だろうと同じ命。

彼は幼いゾルザルの頭を撫でながら自分の夢を語る。

『今の世の中は戦争と差別に溢れている。』

だから、周辺諸国と和平条約を結び平和な世を作った後、俺は虐げられている亜人達の地位を保証して救いたい。

つまり…優しい皇帝になりたいと思っているよ。

道はすごく険しいけどね。』

条約とか地位の保証とか、幼いゾルザルは理解できなかった。

でも、ゾルザルの目には自分の夢を語る義兄の姿が眩しく映った。

自分にはない輝きに憧れた。

『じゃあ！俺も手伝うよ!!ジヨウヤクとかホシヨウとかいまいち分かんないけど、カティ義兄の夢は俺が叶えて見せる!!』

『ハハハハ、ありがとうゾルザル』

『難しい事は、ティアボに任せ！俺はカティ義兄の邪魔をする奴をねじ伏せる!!完璧だな!!』

『そうだね……そんな未来が来るといいね』

夢の手伝いをすると言って、はしゃぐ自分とそれを微笑ましい目で見てくる義兄。

本当にそんな未来がこればいいと願った後。

亜人の暗殺者を雇って、ゾルザルの父を殺そうとしたという罪で義兄は捕まった。

告発したのは義兄の婚約者の女だった。

もちろん、そんなものは冤罪だ。

やってもいない罪を白状しろと連日連夜、休む間もなく責められ続けた義兄は死んだ。

義兄はゾルザルの父と元老院によって冤罪を掛けられて殺されたのだ。

父親が皇帝となった時、はじめにしたのは義兄の婚約者だった女の家の爵位を上げる事だった。

分かっていたが、婚約者もグルだったのだ。

この時、ゾルザルは身内と貴族そしてなによりも貴族の女に恐怖を覚えた。

それから、青年に成長したゾルザルに婚約話が来りするのだが貴族の女を前にすると下半身が委縮し、使い物にならなくなった。

その出来事で男性としての機能を失ったのではないかと思ったゾルザルは妹に夜這いをかけるのだが……まあ、当然無駄に終わったのであった。

そんな昔の事を思い出したゾルザル。

彼は義兄の目標を口にした。

「優しい皇帝になりたい……か」

もし……もし、帝国に帰れたのなら……かつて義兄がなろうとした皇帝になってもいいのではないか？

気まぐれなのか？修行のせいでおかしくなったのかは、ゾルザルにも分からない。

でも……彼の心はとても軽くなっていた。

そして、それと同時に彼はすぐにでもすべき事を思い出した。

それは……。

修行生活六日目……。

「先生……俺、ヴォーリアバニー達に謝りたいと思います」

「おお!!それはいい心がけだ!!」

「たけど……怖いんです!!俺はアイツらの仲間を沢山殺しました。」

それは決して許されない事です。」

ヴォーリアバニー達に謝罪する事を決意したゾルザル。

しかし、生半可な事では許されないと分かっている故に、とても暗い表情を晒す。

そんなゾルザルにガイは謝罪しやすくなる秘訣を教えた。

それは……。

「自分ルールだ!!」

「自分ルール?」

「そう!自分ルールとは、何かを達成しようと思ったとき、失敗した場合の罰ゲームを自分に課するという方法だ。」

失敗したときに罰ゲームを設けることで、自分を限界に追い込むことが出来る。

罰ゲームをしたくないという気持ちから、自分の力をより発揮できるのだ。

例えば失敗したとしても、その罰ゲームによって、自分を鍛えられる。ここで重要なのは、自分のためになる罰ゲームを課すること。

罰ゲームをクリアすることで、次の成功につながるのだ。」

「つまり…俺が何かに挑戦し何かが出来たらヴォーリアバニー達に謝罪。」

出来なければ罰ゲーム。

そうゆう事ですか?」

「おうとも!!さあ、ゾルザルよ!!お前は どうする?」

こうしてゾルザルは演習場百周を目標に走り続けた。

ゆっくりだが、丸一日かけて走った。

修行生活七日目になって、彼は大きく成長した。

「よくやった!よくやったぞ!!ゾルザル!!俺は感動した!!」

「先生えええええ!!」

目標を達成させたゾルザルは根性を見せた褒美としてガイの熱いハグとお揃いのピチピチスーツと『根性』の額あてを進呈された。

そして、どうせならとゾルザルは頭をオカッパにし、汗でびしょびしよとなった服を脱ぎ棄て、シャワーを浴びた後、それらを装備した

状態でバサラ達の帰りを待っていたのだ。

身も心も綺麗になったゾルザル。

だが、酷くなった部分もあった。

彼の性癖である。

物理で殴られ過ぎたせいでドMに目覚め。

ガイのハグによって同性愛に目覚めた。

彼は義兄の夢を引き継ぎ……優しい皇帝になれるのだろうか？

彼の修行の日々は続く!!

「夕日に向かって……ダイナミックエントリー……!!!」

「夢に向かって、ダイナミックエントリー……!!!」

本編第一部終了記念。

ZORUZARU熱血伝!!・完!!

……
かもしれない。

13話

ヴォーリアバニー達が日の国の住人になって、数年の時が流れた。彼女たちは農業地域で働く者、忍者となつて、バサラの城でメイドになつた者。

電化製品に囲まれた生活を謳歌している。

噂では何人かは国の人間と結婚したらしい。

実に妬ましい：いや、喜ばしい事である。

帝国に存在を明かすことなく、平和を手に入れた日の国。

だが、忘れてはならない。

平和とは戦争の準備期間であり、一時的なものに過ぎないという事を……。

激動の時代はすぐそこまで来ていた。

――。

定期偵察部隊として日向ネジ・うちはサスケの2名はアルヌスの丘で見慣れないものを発見した。

「……サスケ、お前はこれをどう見る？」

「写輪眼ではチャクラを纏っているように見えるが……お前は？」

「門の柱に経絡系のような物が見える……地面から何かを吸っているのか？」

門であつた。

しかも、地面から何かを吸い取り、何らかの機能が働いている。

二人はとりあえず門をそのままに、日の国へと急いで帰還した。

「門だと？」

「はい、大地からエネルギーを吸収し、何らかの術を発動させている可能背があります

恐らくあのドラゴン娘……ジゼルが言っていた門ではないかと思

います」

執務室にて、サスケ達の報告を受けたサムイに知らされたバサラは顔を歪めた。

アルヌスの門。

バサラ達、日の国が異世界に渡った原因。

「今すぐ、サイ・サスケ・ネジ・我愛羅・ナルト・ヤマト・鬼鮫を隊長としたスリーマンセルの7小隊で24時間の厳戒態勢をしけ。

部下はそれぞれの隊長に任せる」

「はっ！」

バサラの指示を受けたサムイは瞬身の術で姿を消した。

「ふむ……フォルマル伯爵家のお家騒動に、異世界につながる門か……。

騒がしくなりそうだな」

☆イタリカ☆

「イタチ。フォルマル家のハイエナ女達に僕らはどう動く？」

「当主の急死にやって来た長女と次女……か。

俺達は中立でいいだろう。

無駄な争いに参加するのは、俺達の任務ではない」

「おや？あのお姫様は救わないのかい？ナイト様」

「カブト……本当に殺すぞ」

カブトにからかわれ、本気でキレそうになるイタチ。

彼の瞳には万華鏡写輪眼が浮かんでいた。

チョウジへのデブと同じでロリコンは彼にとって逆鱗に近い。

「まあ、冗談はこの辺にして……僕らは中立。

あのハイエナ共からの勧誘は無視をする。

その方針もいいが、もう一つの見方もある。

君なら簡単に出来るはずだよ」

「……フォルマル家を裏で操る為に邪魔な長女と次女を幻術に掛けるか？

確かに可能だが、あの家には旨味がない。

操った所で元老院に参加していないフォルマル家の意見は簡単に潰されて終わりだ」

フォルマル伯爵は先代皇帝の忘れ形見であつた皇子を支持していた。

故に皇子が現皇帝に殺された後、邪魔なフォルマル家は土地はあるが何も無い田舎へと飛ばされた。

会社でいう所の左遷である。

しかし、何もなかった広大な土地を亜人達と協力し、立派な穀倉地帯へと変貌させ最後には交易都市へと昇華させた。

伯爵なりに皇子の意思と夢を自分の領で実現し、元老院達に皇子を殺した事は間違いだったと思わせる為に頑張つて来たのだ。

だが、元老院は亜人達ではなくフォルマル家当主の手腕をほめただけで終わった。

それどころかフォルマル家の真似をしようと、亜人達を農奴として買い漁る貴族まで現れた。

それ以降、元老院からの招集がない限りフォルマル家当主は帝都に足を運ぶ事がなかったために、伯爵でありながら元老院での地位は最下位にまで落ちていたのだ。

だから、イタチがフォルマル家の人間を写輪眼で操った所で、何も変わらないし、変えられないのだ。

「……違うよ。君が元老院に潜入して一気に写輪眼で操ってしまった方がいい。」

そうすれば帝国なんていう弱小国なんてすぐに終わらせることができる。

いい加減にここに居るのは飽きてきたよ」

「……お前の気持ちは分からなくもない。だが、ここを補給以外で離れるのは命令違反だ」

「相変わらず融通が利かないね、君は……」

「ほ、報告します!!」

二人が店の奥にある店長室で話していると、部下の一人が慌てた様

子で入ってくる。

「本国にて通達!!帝国の元老院が隠密部隊をアルヌスへ向けて出発させました!!」

それで、イタチ様にはサスケ様とB地点にて合流し、任務書に従って行動してください」

☆悪所☆

「ハリヨの掃除が終わったと思つたらこれか……」

「王宮に潜入させた影分身の報告では、20人の帝国精鋭の隠密が出兵したと……」

「殺しに行くか?」

「いえ、それはまずいですね。」

彼らが帰還しなければ、元老院にアルヌスに何かあると教えているもの。

ここは本部にイタチさんかサスケ君を派遣してもらいましょう。

彼らの写輪眼なら幻術で操り、問題なしと報告させれば万事解決です」

「いいだろう。この間本国から来た下つ端共を使い飛ばせ」

「もう、本国に走らせているので問題ありませんよ。」

今頃、イタチさんが動いてるかもしれません」

「そうか……まったく、ゾルザル搜索部隊への情報伝達の妨害に、元老院の監視……。」

コイツを振るう機会が完全に無くなっちまったな」

悪所にある豪華絢爛の館で首切り包丁を撫でる再不斬。

彼は諜報活動ばかりで戦いに飢えていた。

「まあ、完全支配が完了しましたからね。」

まあ、部下達をしごいてあげればいいのでは?」

「そうするか」

首切り包丁を肩に担いで部屋を出ていく再不斬。

この後、悪所に出来た訓練所にて、元孤児やゴロツキ達が悲鳴を上

げることになるのであった。

14話

アルヌスと帝国を結ぶ道。

日の国にてB地点と呼ばれる場所に二人の兄弟が隠密部隊を待ち受けていた。

「兄さん……イタリカの事で聞きたい事がある」

「何だ？」

うちはの天才兄弟、サスケとイタチはいつになく真剣な会話をしていた。

「アンタ……ロリコンになったと言うのは本当か？」

「……お前にその情報を喋ったヤツを教えろ。」

任務が終わったらずぐに殺しに行く」

いや、シリアスなのは表情だけのようだった。

イタチの風評被害が火を噴いてサスケがイタチに説得されている頃、諜報部隊はすぐそこまでやってきていた。

――。

「隊長……。石板に刻まれていたアルヌスの伝承は本当なんでしょうか？」

「帝国に発見された石板に刻まれた内容を学者たちが解析したら、4、5年ほど前に異界の門が開いたはずだと分かった。」

それが本当だろうと、嘘であろうと帝国の未来の為に調べる必要がある。

それに……。仮に異界が繋がっていたとしたら……奴隷を狩り放題だぞ？」

「おお！それはいい!! ついでに異界の領地を貰えれば俺も貴族の仲間入りですな!!」

彼らは貴族の子弟の中で、優秀と判断され過酷な訓練を乗り越えてきた精鋭である。

そして精鋭であるが故に選民意識と出世欲が強い。

男達の脳内は凌辱できる女と土地の事で頭が一杯だった。

「……浅ましい、そして醜い。」

「貴様たちのような人種は殺してやりたい所だが、任務成功の為だ。」

貴様等には生きて帰ってもらう」

イタチ・サスケの瞳が万華鏡写輪眼となつて男たちに幻術をかける。

任務というより、相手が弱すぎてもはや子供のお使いレベル。

幻術に捕らわれた彼らは何事もなかったかの様に帝国への帰路についた。

そして、イタチ達の任務が成功した事により、帝国が本格的に動き始めた。

「皇帝陛下、精鋭たちがアルヌスから戻ってまいりました。」

予想通り……彼らは問題なしと報告をしました。」

「では、マルクス内務相。」

計画通り部隊全員を拷問し、裏切り者を聞き出せ」

皇帝はゾルザルが行方不明になったと知った時、息子の出兵を知つた貴族がかつての自分と同じように皇子の殺害。

もしくは誘拐を行ったと疑っていた。

故に今回の石板発見と門の存在を知った時は皇帝にとって行幸であつた。

皇子殺害と誘拐を企てる人間なら恐らく、精鋭部隊に接触するはず。

任務が成功すれば接触はなしと判断し、失敗もしくは何もなしと報告した場合は接触した可能性があるかと判断して拷問を行う計画となつていた。

「アルヌスへの調査隊は一万の規模で再び編成して向かわせろ」

「分かりました、皇帝陛下」

こうして、本格的に調査団が組まれてアルヌスへと向かう事が決定した。

戦いの時は近い。

☆☆☆

「これより調査の第二段階を行う。

俺と自来也の腰にロープを巻き付け、門の向こうへと潜入。

何か問題があれば合図を送るから勢いよくロープを引け」

暇を持って余したバサラは、暁に国の防衛を任せ、自来也と共に門の調査へと繰り出した。

「しかし、よろしいのですか？あなたにもしもの事があつたら……日
の国の全員が門の向こうに戦争にいけますよ」

「安心しろ、シカマル。いざとなったらワシが肉の壁となる」

「エロ仙人の肉の壁か……女の前じゃあ紙装甲で役に立たなそうだつてばよ」

「なんじゃとー!?!」

緊張感の漂う会話が、ナルトの言葉によって霧散し明るい空気が周りを満たす。

さすがは主人公。

部下のコミカルな会話を見守りながら腰にロープを巻き付けるバサラ。

彼の存在感はシノレベルでかなり薄いのかもしれない。

まあ、二元一般人が漫画のキャラクターレベルで濃い方が異常なのかもしれない。

「自来也、じやれてないで早く準備を終わらせてこっちに来い」

「ハハハ、すみませんのお。」

頭をガシガシ掻きながら謝罪する自来也と並び門の前に立つ。

「さあ、行くぞ」

「はっー!」

門の中に入るとトンネルの様な空間があり、周りは暗い。

しかし、奥には光が満ち、駆け抜けた先には……。

「これは……」

「ほう……門の話は半信半疑だったのですが……これは、どうやら本物ですな」

日本だった!!

「君たち。ちよつといいかな？」

無許可で設置されたこの門のような物について話を聞きたいのだが……。

まずは身分証を見せてもらえるかな？あと、変なコスプレしているけど職業は？」

「こちら、交通課。不審な門を調査中に歌舞伎役者風の不審な男と鎧姿の不審な男二名を発見。

現在職質を開始、応援を求む。」

「えっ？」

そして、日本が誇る税金泥棒……ではなく、国家の犬。

青い制服がトレードマークの警察官数名がバサラ達に職務質問を開始したのだ。

「ほう……身分証明書とやらは分からぬがつまりは素性を明かせということだな？」

警察官の質問と門を見に来た野次馬達の注目が自分に集まっているのを確認した自来也はニヤリと笑った。

バサラは思った、嫌な予感しかしないと……。

そして、彼の予感は当たった。

「男気に溢れたこの魂イ！三忍語りて仙人に！

妙木山の蝦蟇妖怪!!自来也様たア〜ワシの事よオ!!」

自来也の会心の見得。

周りはスマホでポーズを決める自来也を連写し、SNSに投稿する。

そして、目の前にいるお巡りさんの反応は……。

「え〜……不審者一人に覚せ○剤使用の疑いあり。

至急応援を求む」

とても厳しい物であった。

15話

「おいおい、こりゃあめんどくせえ事になったな」

バサラ達が門の向こう側に行った後、早馬に乗った帝国軍がアルヌスに接近していると情報を得たのだ。

しかも、門からやって来た口寄せ動物の話ではバサラ達は門の向こうで一時的に拘束されているらしい。

「おいおい、シカマル。」

もしかして、これってかなりヤバいんじゃないか？」

「もしかなくても、やべえ。」

バサラ様が拘束されたなんて聞いた日には女どもが異世界に襲撃するぞ。

そうなればどれだけの文明と戦力を持っているか分からない奴らとの戦争待ったなしだ」

頭を抱えたシカマルは拘束されたのではなく異世界で交流中とメールで報告した。

連絡手段をメールにしたのはいざという時の為に、拘留中の誤字ですと報告するためだ。

「とりあえず、俺達はこのまま待機。」

いざとなったら、バサラ様が飛雷身の術で自来也さんをつれて帰ってくるだろう」

「ナルトは影分身で帝国の位置を報告してくれ。」

戦力分析がしたいから、映像を送れる機材を渡しておく。

現地についたら撮影をしてくれ。

異世界の資源調査に必要と思って用意しておいてよかったぜ」

「おう！分かったてばよ!!」

門の前が騒がしくなってきた頃、帝国軍の襲撃を聞いたホモ珍獣とオカマが帝国軍へと向かって行った。

☆☆☆

鍛え抜かれた脚力で帝国軍の近くまで接近したホモ珍獣ゾルザルとマツドなオカマの大蛇丸。

彼らとはある出来事から利害関係を結び、実験と修行の成果を試す為にやって来た。

そして、出来るなら彼らを倒してこちら側に付かせる事も考えているゾルザルはただのホモではなく、そこそこ出来るホモに成長していた。

「さあ、貴方の思いと修行の成果を私に見せて頂戴」

「ああ！ たつぷりと見せつけてやる!!」

数キロメートル先の帝国軍に向かって一人で走り出すゾルザル。

そこに、ゾルザルと入れ替わるように現れたナルト。

瞳の色が変化しているので、どうやら仙人モードで加速して来たらしい。

「おい！ アイツ、一人で突っ込ませて殺す気か!？」

「あら？ ナルト君。心配しなくても彼なら大丈夫よ」

「…大蛇丸。お前…何を企んでいるんだってばよ。」

まさかゾルザルに呪印を……」

仙人モードで睨むナルトに余裕の表情を見せる大蛇丸。

「企むだなんて……彼には私が開発した特性の丸薬を与えただけよ？」

それに…呪印はまだ、彼にあげるつもりはないわ」

「……」

「もちろん。彼が望まなければ与えないから心配しなくても大丈夫よ」

大蛇丸は嘘をつかない。

同じ国の忍としてナルトはよく知っている。

怒りを一旦沈めたナルトは大蛇丸を無視してカメラを帝国軍に回し始めた。

「あら？ それって確かビデオカメラよね？ バサラ様が考案し、科学忍具を製造していた技術者が作ったっていう」

「ああ、俺も使うのは初めてだってばよ」

「なら、しっかりと撮影なさい。丸薬を摂取した時の彼は…おそらく

日の国最強よ」

日の国最強。

つまりは暁はもちろん、バサラを超えたという事になる。

このオカマは一体どんな丸薬をゾルザルに渡したのか？

「：丸薬に頼っている奴に俺達の大將は負けねえつてばよ」

「そうね。そうかも知れないしそうでないかも知れない」

「お前：何が言いたいんだつてばよ」

「今は彼を見なさい。答えはそこにある」

シリアスな会話を終えた大蛇丸とナルトはそれ以降会話する事無くゾルザルを見守った。

☆☆☆

「な、なんだあれ？」

「：へ、変態だ!!変態が突っ込んでくるぞ!!」

帝国軍最速を誇る、帝国騎馬隊。

先頭を走る兵士達は全身緑タイトの男が突っ込んで来るのに動揺した。

「落ち着け!!たかが変態一人だ!!馬でひき殺せ!!」

動揺してスピードを緩め始めた兵に歴戦の勇士である小隊長が活を入れた事により、動揺が収まる。

ただ、小隊長は選択を間違えた。

もし、ここで変態から逃げていればあのような悲劇は起こらなかつたろうに……。

兵との接触までごくわずかとなった距離でゾルザルは立ち止まりポーチから一つの丸薬を取り出す。

大蛇丸からもらった丸薬だ。

この丸薬を見ていると受け取った時の事を思い出すゾルザル。

『本当にいいのね?』

『ああ、ガイ先生に振られた俺に躊躇する事は何もない』

『良い答えね…ゾルザル君。でも…これはここぞという時にしか使つてはダメよ』

帝国が間違えを犯そうとしている、今がまさにその時!!

ゾルザルはその丸薬を躊躇なく食べた。

ゴリゴリと歯で噛み砕き一気に飲み込む。

「うおおおおおおお!!…多重影分身の術!!」

すると彼の中の小さなチャクラが活性化し、まるでガスバーナーのようにチャクラが全身から噴き出す。

そのチャクラ量は尾獣並みだ。

才能のないゾルザルではあるがチャクラに物を言わせて無理やり千人規模の分身を作り出す。

『ゾルザル忍法帖の開幕だあ!!』

千人規模のゾルザルに足を止める帝国兵。

「なんだ!? 変態が増殖したぞ!!」

「どうなっている!? 新手的魔法か!？」

「惑わされるな!! あんな魔法は聞いた事がない!! おそらく幻だ!!」

臆せず突っ込め!!」

千人規模の変態に同様する帝国兵だったが、勇ましい小隊長が先陣を突っ込む事で彼らも前に進んだ。

『変化!!』

ボンボボンと煙を巻き上げ変化するゾルザル。

「あの変態…何を企んでいるのかは知らないが、我ら帝国兵が企みごと食い破ってくれ!!」

『おおおおおお!!』

隊長の勇ましい言葉に当てられた兵士たちは勇ましい咆哮を上げながらゾルザル軍団に突っ込む。

その距離は数メートル。

『ぎゃあああああ!!』

しかし、そこで戦士達の勇ましい方向は絶叫に変わり、馬もあまりにもおぞましい光景に本能で緊急停止した。

愛馬の緊急停止に沢山の兵が落馬したが関係ない。

16話

警察に任意同行した俺達は別々の取調室にて刑事さんの取り調べを受けていた。

「どこから来たの？出身は？」

狭い部屋の中にある机の向こうで強面の刑事が俺に質問をする。

とても答えずらい……異世界から来たなんて言ったら自来也と同じ尿検査を受ける事になる。

しかし、取り調べでは嘘をついてはならない。

それに、嘘ではないのだ、元日本人としてここは正直に答えよう。

「門を通じて異世界から来ました」

「おい、コイツも尿検査だ。」

お茶を入れられないように注意しろ」

「分かりました。すぐに手配します」

ですよねー。

程なくして尿を検査する為の機材を持った人たちが現れ、男子トイレにて警察官に出すところを凝視されながら検尿カップに注いだ。

途中『で、でかい……』と言うお巡りさんの声は聞こえなかった事でしょう。

「陽性反応は……ありません」

「本当か？なら認知症の疑いがあるから病院に検査の手配をしろ。」

あの白髪も一緒だ」

カップに入れた綿棒やスポイトで採取した尿を機材で調べたが陽性反応は当然出る事はなかった。

しかし、刑事さんはもう一つの可能性として脳の異常を考えたようだった。

別々のパトカーに乗せられた俺達は総合病院にて脳の検査を受ける事になった。

その結果……俺達は日本人を勘違いしている海外のスパイではないかと疑われるようになった。

異世界が海外に当たるのかは分からないが少しでも真実に近づい

たようだ。

「おまえ…どこの職員だ？その顔は整形だろう？」

もう少し日本人の勉強をしてから来るんだったな。

もうすぐ、防衛相の人間がやって来るから待つて居ろ」

俺と自来也を同じ牢にいれ、出ていく刑事さん達。

彼はアジアの特定の国が嫌いなのだろう。

吐き捨てるように言つて出て行つた。

俺も前の世界にて直接的に迷惑をこうむつた事があるから同意だ
がな。

つーかこの時代においてもやっぱり嫌われているんだな……。

日本はアジアの嫌われ者。

キムチは世界の嫌われ者。

自転車は宇宙規模の嫌われ者とよく言つたものだ。

「それで？いつまで大人しくしているつもりですかの？」

もし、暁のおなご達が貴方の姿を見たら間違ひなく戦争ものです
ぞ」

「あー。俺達は外国の職員と思われているらしいから仕方がないだ
ろう。

それに、俺達に会いに来るのは防衛相だ。

この国の防衛を司る人間ならば上層部の人間だ。

上手く事情を話してコンタクトを取れば、友好的になるだろうし、
何かしらの利益にはなるはずだ。」

「まあ、パトカーとやらの製造方法が分かれば我々でも作れそうです
し、建築技術も向上しましょう。

ですが、相手は我々よりも僅かですが文明を先に行つていていると思
いますので足元を見られませぬか？」

「それは…その時だな」

「いい加減と思いますが…今は情報が少ないからやむなしですな」

それから数時間後。

ゾルザルのフルカスタムジョニーが火を噴いている頃、世界は門に

よって驚きに包まれた。

二人が警察のお世話になっている頃、交番の警察官が報告書をまとめる為に門を調べていた。

大きさや、素材などを大体記入した彼らは内部構造を調べる為に中に入った。

するとそこには長いトンネルがあった。

慌てて外に出て、門の後ろを確認するも、門の中でみたトンネルはない。

この摩訶不思議な未知の遭遇に門を調べていた警察官は驚いた。

不思議な門について、抱えきれなくなった警察官はすぐに上司に相談した。

この時の彼の行動は正しい。

しかし、彼は重大なミスをした。

大した規制もせず、民間人が沢山歩いている銀座の街で大きな声で無線を使って話してしまったのだ。

バサラ達が捕まった辺りから門を見物していた大学生く好奇心旺盛な女子高生に報告を聞かれてしまい。

『異世界人キタコレ!!』

『銀座の町に異世界に通じる門が出現!!パトカーに乗せられた二人は異世界人なのか!?!』

みたいな感じでSNSなどのツールを利用して、世界に拡散。

もちろん観光に来ていた外国人や在日の外人も門の存在をSNSで拡散していた為、信憑性が高い情報として世界のネットニュースで取り上げられるようになった。

後日、世界の関心を集めたこの門は、日本の調査チームによって調べられることになるのだが、海外のスタッフを貸すので珍しい物を発見した場合は分けてほしいなどと沢山のオファーが届くことになる。

他にも……。

『あれは千年前に我が国から日本に盗まれた門ニダ!!即刻返すニダ!!』

『東京はもともと我が国の領土だったニダ!!つまりあの門は我が国の

物ニダ!!』

『慰安婦問題について許してやるから、一番初めに門を調べる権利をよこせニダ!!』

『日本の独占利益は許さないアル。利益が出たら南京で虐殺した国民の賠償として我々にも寄越すアル

へ?学生を虐殺?天○門事件?何それ?食えるの?』

『尖○には手を出さないから門をよこすヨロシ』

『世界に向けて発表します。あれは、我々の指導者が設計し、パーツを一つ一つ組み上げて作っていた物です。

しかし、日本の工作員に奪われました。

我々はこの事を強く批判し、門の返還を要求します。

総統閣下バンザイ!!!』

『催促するわけではないけど、アメリカにも一枚噛ませてくれるよね?』

『門で利益があり、我々にも共有してくれたら日本を信頼し、北方○土を返還しよう』

等々、簡単であるがなかなかのアプローチに国会は大忙しになる。

勿論、豚足様や任期が終了すると共に処刑されたり逮捕される大統領の国のご意見は完全に放置された。

世界に異世界ブームが巻き起こる。